

詩ってむずい？

滋賀大学詩作ワークショップ☆詩人と一緒に詩を書こう

2022年8月4日(木)

集合時間: 8:50  大学  彦根港  多景島  彦根港  大学

場所: 滋賀大学 (彦根キャンパス)

対象者: 小学5年生から高校3年生まで

定員: 16名 (抽選)

参加費: 無料

申込み/問合せ: 裏面の専用サイトへ

ひらめき☆ときめき



詩ってなんだろう？

感じたことを言葉にしよう

声に出して詩を読もう

今日の君は大学生☆
とびきりの一日を
体験しよう

©滋賀大学
カモンちゃん

経済学部ワークショップReD#ensemble共催
JSPS 科研費 JP22HT0103助成事業

小・中・高校生のための
プログラム



夏休み校外学習

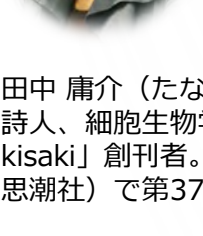
KAKENHI

研究機関名：	滋賀大学（住所：彦根市馬場1-1-1）
プログラム名：	詩ってむずい？～詩人と一緒に詩を書いて朗読会をひらいてみよう～
先生：	経済学部教授 菊地利奈
集合場所：	彦根キャンパス（ https://www.econ.shiga-u.ac.jp/12/ ）土魂商才館
集合時間：	2022年8月4日（木）8:50
問合せ：	滋賀大学経済経営研究所 TEL：0749-27-1047 FAX：0749-27-1397 ✉ ebr@biwako.shiga-u.ac.jp

	申込み方法：（どちらかを選択） (A) 「ひらめき☆ときめきサイエンス」のURL： https://www.jsps.go.jp/hirameki/02_jisshi_program.html にアクセスし、参加申込フォームに入力する。 (B) ebr@biwako.shiga-u.ac.jp 宛に以下の項目をメールする。 締切日については（A）のサイトで確認すること。 ① 氏名（フリガナ） ② 在学する学校名、学年 ③ 生年月日（1日傷害保険に加入のため） ④ 連絡先住所（郵便番号も） ⑤ TEL（日中の連絡先） ⑥ E-mail（必ずパソコンからのメールを受信できるように設定しておく） ⑦ 保護者からの参加同意（受講には保護者の同意が必要） ⑧ 応募するにあたって知りたいことがあれば。（食物アレルギーがある方は、内容を記す） ※当プログラムでは、保護者・学校関係者による見学はご遠慮いただいています。	
--	---	---

申込みにあたって：	➤ サイト内にある「申込方法」「保護者の方へ」「プログラム概要」を読んで、内容をご理解いただいたものとして運営します。なお、登録をお願いした個人情報は本企画の運営にのみ使用し、終了後は削除します。 ➤ 船は貸切です。びわ湖クルーズに出る行程のため、移動の多い1日となります。安全な行動がとれるようみんなで協力していきましょう。
-----------	---

08:50	彦根キャンパスに集合	12:20-12:40	キャンパスまで歩く（約15分）
08:50-09:00	受付	12:40-13:35	ランチと講義④
09:00-09:40	開会式と講義①	13:35-15:40	実習③（おやつ休憩と質問タイムあり）
09:50-10:20	彦根港まで歩く（約15分）	15:40-17:00	実習④自作朗読発表会
10:20-10:40	乗船-多景島へ出発…講義②	17:00-17:20	修了式
10:40-11:20	多景島滞在…実習①	17:20	解散
11:20-12:20	乗船-沖の白石経由-彦根港へ戻る …講義③と実習②		

	川口 晴美（かわぐち・はるみ） 福井県小浜市出身、東京在住。1985年に最初の詩集『水姫』を刊行。詩集『半島の地図』（2009年、第10回山本健吉文学賞）、『Tiger is here.』（2015年、第46回高見順賞）。最新詩集は『やがて魔女の森になる』（2021年）。	
	田中 庸介（たなか・ようすけ） 詩人、細胞生物学者。東京生まれ。詩誌「妃 kisaki」創刊者。『ぴんくの砂袋』（2021年、思潮社）で第37回詩歌文学館賞受賞。	
		岬 多可子（みさき・たかこ） 千葉県生まれ。お茶の水女子大学在学中に詩作をはじめ。2007年『桜病院周辺』で第37回高見順賞、2021年『あかるい水になるように』で第2回大岡信賞を受賞。

2022年度版

定期船で行けるのは
彦根港だけ!

Takeshima

多景島

びわ湖クルーズ

びわ湖の
軍艦島

多景島日蓮聖人像

多景島見塔寺



彦根藩井伊家ゆかりの島 日蓮宗 見塔寺

お手軽な彦根の観光のひとつとしてご利用いただけます。

※詳しくは裏面をご覧ください。



船内では観光案内の映像をご覧いただけます



多景島のご案内

※写真はすべてイメージです。

★ …ビュースポット

日蓮聖人像

若き日の日蓮上人の姿で、高さは6尺(約180cm)です。



多景島 MAP



れい む さん けん どう じ

霊夢山見塔寺

明暦元年(1655年)に、琵琶湖に沈んだ人々と魚介類の供養の為に慈雲院日靖上人が開山した日蓮宗のお寺です。日靖上人は越前の国大野の出身で、長浜の妙法寺で修行中の明暦元年に夢のお告げでこの島に渡り、石の宝塔と庵を建立されたそうです。第三代彦根藩主・井伊直澄は法華経信仰が篤く、彦根藩裏鬼門の祈願所としました。



誓いの御柱

大正13年(1924年)に建立され、島の一番高いところにあります。五角形の柱の五面それぞれに明治天皇の五箇条の御誓文が刻まれています。当時、滋賀県の警察部長だった水上七郎氏の呼びかけで、約70余万人から寄付を受け、紛争などが絶えない時代を匡正すべく日本の中心地であるこの島に建立されました。皇室からも下賜金を賜ったそうです。



石造七重層塔

第三代彦根藩主の井伊直澄が父・直孝に恩義を感じ、供養の為にこの石造七重層塔(高さ8m)を建てたといわれています。



釈迦断食行像

日本に一体しかない出山釈迦牟尼佛の座像が祀られています。

彦根港⇄多景島

	彦根港 Hikone port	多景島 Takeshima Island			彦根港 Hikone port
	発	着	滞在時間	発	着
1日1便 運航	15:00	15:20	30分	15:50	16:10

事前予約が可能です。弊社ホームページよりご予約下さい。

乗船運賃

おとな	学 生	小学生
1,500円 (税込)	1,200円 (税込)	750円 (税込)

多景島の拝観料(おとな200円・こども100円)は乗船料に含んであります。

運航期間

3月1日~3月31日・4月21日~11月30日

- ・花火大会他イベント開催日は運休することがございます。
- ・ベツト同伴のご乗船はお断りいたします。(多景島はベツト入島禁止のため)
- ・学生運賃は中学生・高校生・大学生の方に適用されます。・学生証(中学生・高校生・大学生)をご提示ください。
- ・15名以上で1割引させていただきます。・お客様の手荷物はコインロッカーをご利用下さい。
- ・天候その他により各時刻表の一部を変更または運航中止(欠航)することがあります。・船内は全席禁煙となります。

観光船乗り場ご案内

彦根港

無料駐車場有

- 名神高速道路彦根 I.C. から4km (約10分)。
- 彦根駅西口(JR・近江鉄道)から2.6km、徒歩約30分、タクシー約8分。
- 東海道新幹線米原駅西口(びわ湖側)からタクシー約12分。
- タクシーのご用命は近江タクシー TEL.0570-02-0106 までお電話下さい。

土日祝 無料シャトルバス時刻表

(彦根駅西口⑥番のりば) 所要時間約8分
※無料シャトルバスは平日は運休です。※平日はタクシーをご利用ください。ご利用いただいたタクシーの領収書を窓口にご提示いただいた方は、乗船料を3割引でご利用いただけます。尚、他の割引との併用は出来ません。
※領収書は、当日限り有効です。

行き	彦根駅西口発(→彦根港)	8:30	9:30	11:30	13:30	14:30
帰り	彦根港発(→彦根駅西口)	11:50	12:50	14:45	16:20	16:40

お問い合わせ・ご予約は

オーミマリン

彦根港支店

近江トラベル株式会社
滋賀県彦根市松原町3755
FAX.0749-24-7999

TEL.0749-22-0619

営業時間8:30~12:00/13:00~17:00

オーミマリン



新型コロナウイルス感染防止対策として、乗船前の検温・手指消毒・マスク着用のご協力をお願いいたします。

時間割

08:50	彦根キャンパスに集合（土魂商才館 3 階）	
08:50-09:00	受付（セミナー室I）	
09:00-09:40	開会式とワークショップ①	・ 菊地利奈先生よりあいさつ ・ カケンヒって何？ ・ 先生たちのしょうかい ・ 今日のワークショップについて
09:40-09:50	トイレ休けい	

09:50-10:20	彦根港まで歩く（約15分）	
10:20-10:40	乗船-多景島へ出発 ワークショップ②	
10:40-11:20	多景島に上陸して散策 ワークショップ③	「ことばを探してみよう」
11:20-12:20	乗船-沖の白石～彦根港へ戻る ワークショップ④	「ことばと遊んでみよう」

12:20-12:40	キャンパスまで歩く（約15分）	
12:40-13:35	ランチ（カフェ ラグーナ） 先生による詩の朗読	「詩の朗読をきいてみよう」
13:35-15:40	ワークショップ⑤（3つの部屋） 最後におやつ休けい（ラウンジ）	「詩をかいてみよう」
15:40-17:00	自作朗読発表会（セミナー室I）	「詩を体験してみよう」
17:00-17:20	修了式	・ 未来博士号の授与 ・ 記念写真をとる
17:20	解散	

- 実習で外を歩くときは、人との間をあけて熱中症にならないようマスクをはずしてください。
- トイレ休けいを何回も呼びかけます。みんながいる場所からはなれるときは、まわりの人に声をかけましょう。
- 具合が悪くなったら、遠りよしないですぐに教えてください。

詩ってなんだろう？

国語の教科書で誰もが詩を読んだことがあるはずですが、なんだかよくわからないものだと思うがちです。でも、詩は古今東西人間社会に欠かせないものとして存在してきた文学表現で、詩の研究は最も古い学問のひとつです。

このワークショップでは詩人のみなさんに「先生」になってもらい、参加者のみなさんと一緒に、詩を読んだり聞いたり書いたりしながら、みんなでことばと遊び、ことばを楽しみ、ことばを体験していきます。教科書や新聞で読んだことのある詩人と実際に会い、みんなで近江の土地を散策し、琵琶湖の風を感じながら、ことばを探し、ことばと出会い、語り合い、自分だけのことばで詩を書いてみませんか。詩人の先生たちと一緒に歩けば、新しい世界、新しいことば、新しい自分が、きっと発見できます。



先生たちのプロフィール

菊地利奈
(きくち りな)

滋賀大学経済学部 教授



アイルランド、アメリカ、イギリス、オーストラリアと日本で暮らしたことがあり、それぞれの国でたくさんの詩人と友人になりました。彼女・彼らのすばらしい作品を、世界中の人たちに読んでもらいたいと思い、現代詩の翻訳や研究をするようになりました。英語から日本語に訳すことも、日本語から英語に訳すこともあります。

研究者というと、大学にこもって難しいことをしている人というイメージがあるかもしれませんが、私は研究論文を書いたり学会で発表するだけでなく、詩人たちと一緒に、詩の朗読会や翻訳ワークショップを開催したり、世界中から詩人が集まる国際詩祭に参加したりしながら、詩を読んだり書いたりすることの喜びを伝えていきたいと思っています。



撮影者：深堀瑞穂



詩人の新井高子さん（左）と川口晴美さん（右）

撮影者：深堀瑞穂



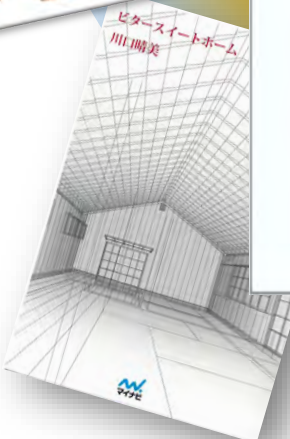


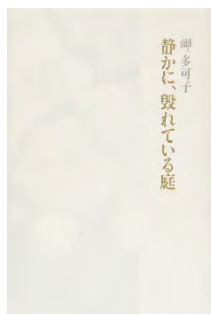
川口晴美
(かわぐち はるみ)

詩人

福井県小浜市生まれ。大学進学をきっかけに東京に移り住み、そのまま現在まで東京に暮らしています。子どもの頃はとても人見知りで、本がいちばんの友達でした。とにかく読んだり書いたりすることが好き、それ以外に得意なことがなく、大学を卒業してからしばらく会社勤めもがんばりましたが、今は詩人として文章を書いたり教えたりする仕事をしています。

23歳のときにつくった最初の詩集『水姫』は、海や川を身近に育ったことが影響したのか、水をイメージする詩が多くなりました。マンガやアニメもずっと好きなので、数年前には大好きなアニメを題材にした詩を書き、『Tiger is here.』という詩集をつくりました。最新詩集は『やがて魔女の森になる』です。





岬多可子
(みさき たかこ)

詩人



小中学生の頃は合唱曲の歌詞、高校では書道部で取り組んだ詩の言葉、そんなところから詩への関心がふくらんできたように思います。本格的に詩を書き始めたのは大学生の頃からですが、それから詩のことをずっと勉強してきたというよりは、読みたいものを読み、書きたいように書いてきたのかもしれません。これまでの人生で、一番長くつづけていることでもあり、詩を書くときが一番自由になれると感じますが、今でも、詩ってなんだろう？ 詩ってどうやって書いたらよいのだろう？ と思うことがよくあります。

ふだんは、千葉市の小学校で週三日、小学生の皆さんといっしょに勉強したり、先生方のお手伝いをしたりして、過ごしています。詩のことだけを考えつづけているわけではなく、針仕事や、草木や虫たちの観察をしながら歩くこと、そしてかわいらしいものやきれいなものも大好きです。



ふづくら幻影
長田典子

人の声は
水の膜が張ったように聞こえにくい
それでも
忘れない
失われた土地の名を

『ふづくら幻影』は消滅した里郷を文明に参差する作風である。
忘れ去れない思い出や遠友が水の幻影のように儚ってくる。——八木研史

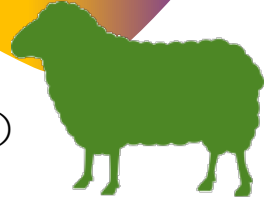
土を向いて歩こう

岩波社



長田典子
(おさだ のりこ)

詩人



神奈川県生まれ。7歳まで暮らしていた村がダム湖に沈んだことがきっかけで、小学生のときから、人間関係や社会のできごとがとても気になる子でした。生まれ育った村がダム湖になってしまったことで生活環境が大きく変わり、楽しいことも哀しいこともたくさんありました。これはわたしの大きな「心の財産」になりました。あの頃、大人になったらこのことをぜったいに文章に書く、となぜか思い続けていました。学年が上がるにつれて、実はその思いをすっかり忘れてしまっていたのですが。

ひとり遊びも好きな子でしたが、小学校高学年になると、放課後は毎日男の子に混じって校庭や広場で元気に遊んでいました。詩を読んだり書いたりすることも大好きでした。大人になって自分で生活ができるようになってから、詩の講座に通えるようになり、詩を通して、たくさんの人と知り合い詩の友だちがたくさんできてとっても幸せです。

もっと広い世界を知りたくなってお金を貯めアメリカに2年間留学したのは10年前です。大人にとって10年前って、ついこの前のことなんです(笑)。アメリカではたくさんの国の人と友だちになれました。そのことを『ニューヨーク・ディグ・ダグ』という詩集にまとめました。その後、子どものときにダムに沈んだ村の思い出をまとめた『ふづくら幻影』という詩集を、あれから半世紀以上も経た今になってようやく出版できました。

詩や文章を書くって、わたしにとっては、子どもの頃からの心の支えでした。うれしいことや哀しいことがあると、詩や物語にしてノートに書いてきました。それは今も同じです。

今は月に何回か小学生や中学生に作文や詩を教えています。



たなかようすけ
田中 庸介

1969 年東京生まれ。詩人・細胞生物学者。

● 詩集

『山が見える日に、』

『スウィートな
群青の夢』

『モン・サン・
ミシエルに行きたいな』

『びんくの砂袋』



装画=沢野ひとし
装幀=南伸坊

装幀=ミルキィ・インペ

装画=出久根育

装画=中上あゆみ

造本=祖父江慎・他

代表的な詩=「オフ、」

「数字短歌」

「からし壺」

「花」「びんくの砂袋」

年・出版社=1999年思潮社 2008年未知谷

2018年思潮社

2021年思潮社

中原中也賞 最終候補

詩歌文学館賞

● 詩誌「妃」(1999～現在、1～23号) 編集・発行

● 自然科学の分野における主な貢献 (英語の論文)

1. Tanaka Y, Kanai Y, Okada Y, Nonaka S, Takeda S, Harada A, Hirokawa N: Targeted disruption of mouse conventional kinesin heavy chain, *kif5B*, results in abnormal perinuclear clustering of mitochondria. *Cell*, 93(7):1147-58, 1998 キネシン分子モーターによって、ミトコンドリアが細胞に運ばれる。
2. Tanaka Y, Okada Y, Hirokawa N: FGF-induced vesicular release of sonic hedgehog and retinoic acid in leftward nodal flow is critical for left-right determination. *Nature*, 435(7039):172-77, 2005 胎児のノード線毛が回転して左向きに羊水が流れることにより、左右非対称な内臓のかたちが決まる。
3. Tanaka Y, Niwa S, Dong M, Farkhondeh A, Wang L, Zhou R, Hirokawa N: The molecular motor KIF1A transports the TrkA neurotrophin receptor and is essential for sensory neuron survival and function. *Neuron*, 90(6):1215-29, 2016 キネシン分子モーターの異常により神経の難病が起こる。
4. Yoshihara S, Jiang X, Morikawa M, Ogawa T, Ichinose S, Yabe H, Kakita A, Toyoshima M, Kunii Y, Yoshikawa T, Tanaka Y, Hirokawa N: Betaine ameliorates schizophrenic traits by functionally compensating for KIF3-based CRMP2 transport. *Cell Reports*, 35:108971, 2021 統合失調症という精神病の患者さんの脳の変化に対してベタインの服用が有効である。 他 論文合計40報



アンソロジー
辻征夫代表詩選
山下青男・選
工藤誠
小川博年・ねじめ正一
田俊子・八木幹夫・辻憲
エッセイ
上野哲夫・小川三郎・
川村之
作品
田傳造・戸次祥子
アンソロジー
辻征夫

現代詩手帖

特集
これから読む辻征夫



3
2019
March

短歌集中連載詩 + 加藤典洋「僕の一〇〇〇と一〇の夜」
特別連載 + 和合亮一・赤坂憲雄・相馬千秋
海外詩レポート +
パット・ボラン 波のかたちの群れなす俳句（根本伸明・訳）
オーストラリア発！ 英語圏共同翻訳の試み（菊地利奈・編）

私と辻征夫
小沢信男、大橋政人、柴田千曲、甘栗順治、白井明大、峯澤典子、久谷雄
パット・ボラン 波のかたちの群れなす俳句 根本伸明訳・解説
オーストラリア発！ 英語圏共同翻訳の試み #1 菊地利奈編・解説

細田信造

多田

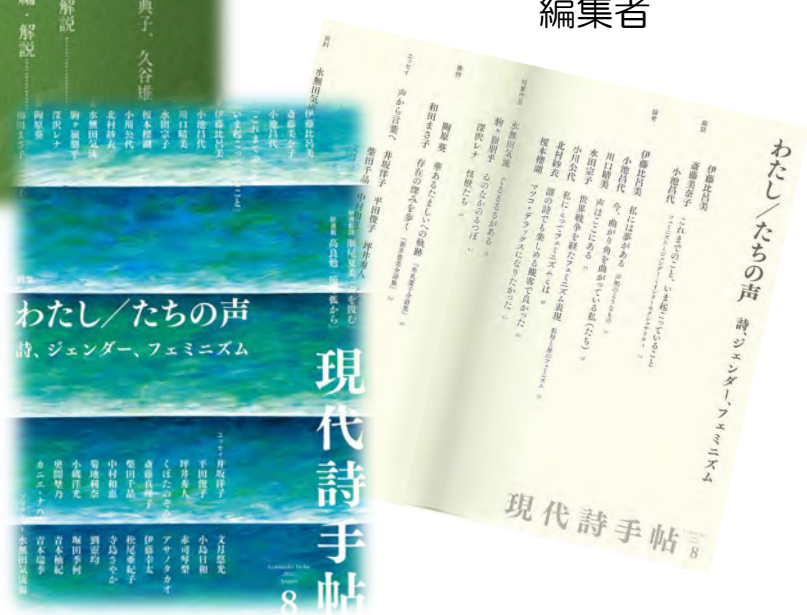


藤井一乃
(ふじいかずの)

編集者

第六十二巻・第三号
二〇一九年三月一日発行
編集人 藤井一乃
発行人 小田康之
発行所 株式会社 思潮社
東京都新宿区市谷砂土原町三十一番五
郵便番号 一六二一〇八四二
振替 〇〇一八〇一四一八二二
電話 〇三三三二六七八一四一【営業】〇三三三二六七八〇一
FAX 〇三三三二六七八一四一【営業】〇三三三二六七八〇一
印刷所 文唱堂印刷株式会社
定価 1280円 本体1185円

現代詩手帖 3月号



本をつくるしごとをしています。

本は、書きませんかとお願いする人がいて、書く人がいて、それを受け取って
 どういう本にするか考える人がいて、印刷する人がいて、製本する人がいて、それ
 を運ぶ人がいて、本屋さんに並べて売ってくれる人がいて、はじめて本が私たち
 たちの手元に届きます。この、書きませんかとお願いして、受け取ってどういう本
 にするかを考えるのが「編集者」です。おもなしごとは、文字の間違い探し！
 根気がいりますが、本づくりは楽しいです。

詩の編集者になったのは、大学生のときに今日、参加されている岬多可子さん
 の詩を読んだのがきっかけです。



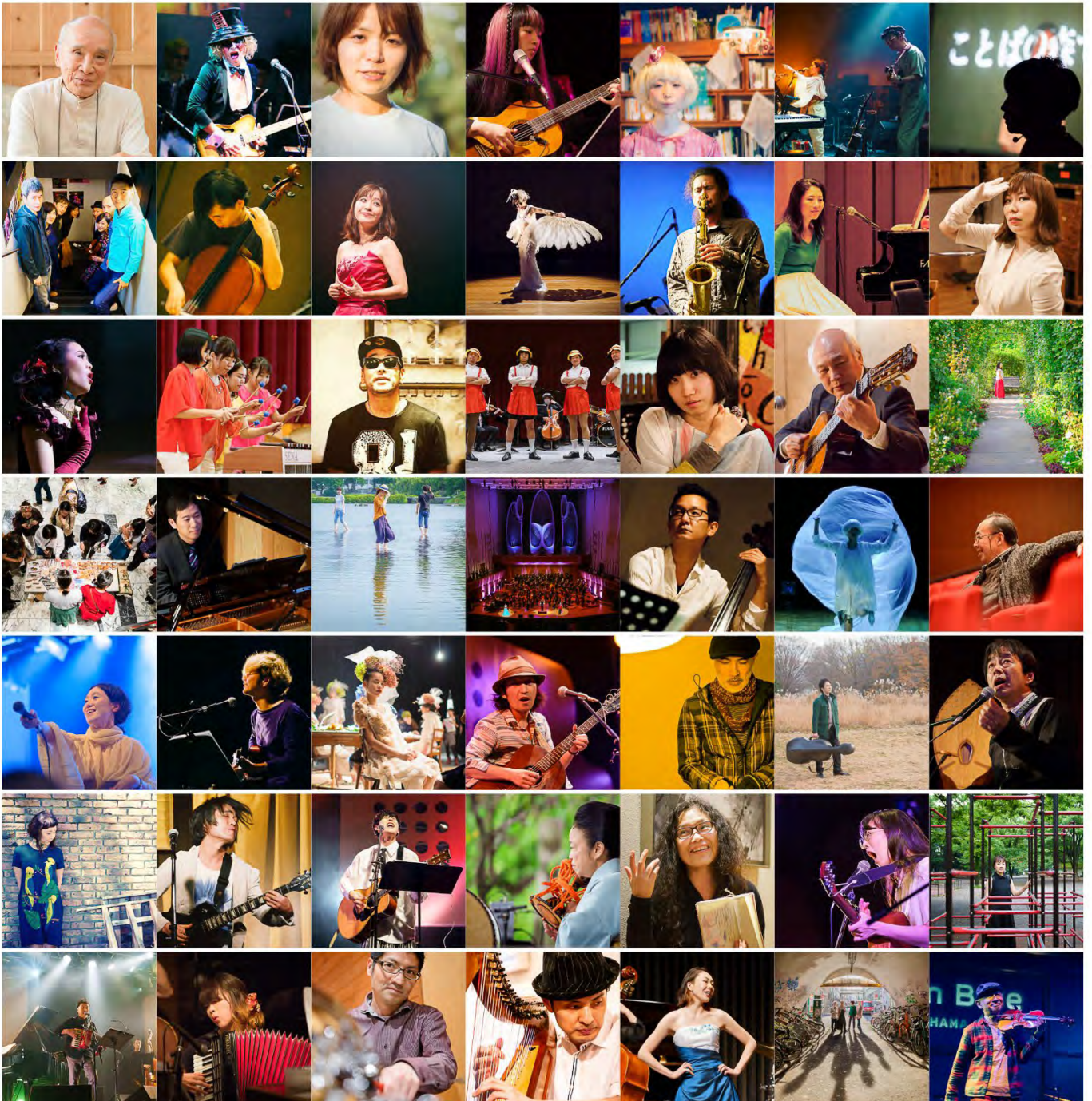
©kazumi ishige

深堀瑞穂 FUKAHORI mizuho 写真家

ステージ・イベント写真家として音楽家・詩人・役者・ダンサー・美術家など表現をする人たちやその活動を支えて表現の場をつくる人たちの「表現しようとしている姿」の魅力に惹かれて様々な公演や制作現場、展示風景などを撮影しています。より正確に言うと、見えている姿形ではなくその人の何かを表現しようとする気持ち、そういう生き方を撮ろうとしています。写真展を開いたことはありません。撮られた人が写真を見て喜んでくれるのが嬉しい一心で人知れずひっそりと活動中です。

※詩人を撮ったもののうち一部は下記 URL で公開されています。

詩を本の外にひらく詩のレーベル「obla()t」イベントギャラリー <http://oblaat.jp/gallery/>



川口晴美先生の詩

スイカタイフウ

雨が降り出す前に

自転車に乗って

おおきな果物を運ぼう

ふたつもらったうちのひとつを

ともだちにあげる

こわれないようにやわらかく包んで前カゴに入れ

オスソワケオスソワケとペダルを踏んで

坂道を上って

踏切を越える

おおきな台風が接近中だ

テレビ画面では赤く丸いかたちで示されていた雨風が

もうすぐここに届く

吹き荒れるのだ

交差点を曲がるわたしの額に

やがて降る雨粒のように汗が滲み

鼓動が少し速くなる

脇道から出てきた車を避けようとあわてて転んだなら

前カゴから丸いかたちは転げ落ちてこわれ

赤く飛び散るだろう

吹き荒れるつめたい血のようにアスファルトを濡らして広がるのを

見たい気持ちになりそうで

ハンドルをにぎるてのひらに力をこめる

こわさないように

こわれないように

先週ともだちがわけてくれたサクランボはきれいだった

出かけるついでに朝の駅で待ち合わせて受け取って

夜の部屋でひとり食べると光の味がした

いつまでもからだのなが明るむみたい

思い出して

届けに行く

スイカスイカとペダルを踏めば

やがて切りわけて食べるひとの唇を濡らしながら

からだのなかを甘くゆるませる雫は

薄い血のように見えないところへ滴って

体温に近づいていくだろう

触れあって

混じってゆくわたしたち

汗と雨のように

果物と果物のように

果物とからだのように

見えないどこかでちいさなキスを繰り返す

吹き荒れてもこわれないように

こわさないように

行く

雨の最初のひと雫だろうかわたしの汗だろうか

アスファルトにちいさな丸いかたちを残し

台風は自転車のスピードで接近中

越えて

子どもの頃からこうやって線を引いて遊んでいるよねぼくたち

校庭にはあらかじめ粉っぽい白線がしるされていたけどそれは退屈で

だから走って鉄棒をくぐり抜け半分だけ埋められたタイヤの列を踏みまたいで

校舎の陰のひんやり湿った地面に

運動靴のつまさき押しつけて片足跳びをしながら

線を引いていく最初と最後をぐるりつないだらほら大きな島だ

線の外側は海

やわらかい土のうえ歪な花のようにひらいたぼくたちの島に

たからものを隠して休み時間のあいだじゅう

おたがいを海に落つことそうと体ぶつけあった

手についた錆のにおい日に焼けたゴムタイヤのにおい窓ガラスは光って

まぼろしの波飛沫を見るぼくたちの

皮膚は海のおいがした

それは外側なのか内側なのか

線の外側には出ちゃいけないきまり

なのにあふれそうになる

たのしくて

つまさきばかりが羽のように汚れてしまう

日曜は学校へなんか行かない

空地のそばの道は車も通らないから

白くかける石をひろって誰もいないアスファルトに

線を引いていくたったひとりでも

○とか×とかむずかしい漢字を勝手につくってみたり

恐竜とかマンガの絵とかはすぐに飽きちゃって

なんでかな「バカ」とか「うんこ」とか書くと愉快なきもちになって

おなか痛くなるくらい笑っちゃうけどそれも一瞬のこと

だからただ線を引く

できるだけまっすぐに世界の果てまで

ざらざらの路面にこすれてふるえる指と手のひらがくすぐったい

どこまでも遠くへ

いくはずだったのに道は途切れて

世界の果てはすぐそこにある

ここから先へは行けないよって誰かが引いた見えない線に

立ち止まって立ちすくんで

陽射しを浴びた後頭部がくるしくなつて膝の擦り傷に砂が入り込んでいる

それで見上げたら頭上はるか飛行機雲が伸びていたりするんだ

あれはきつと空を切り開くためにしるされた線

知らない何かに触れるのは痛いかもしれないのに

あふれてしまうよね

たからものはまだここにある

向こう側にもあるって知っているから大人になってもぼくたち

越えていく皮膚

滲んだ線は空のにおいがした

世界の雫

銀色にひかる蛇口から

朝を貫く水の柱が伸び

つなぐことのできない指のように揺れている
冷たくて

体の奥のほう

さつきまで夢だったところが

ぼんやりと痛い

やわらかな草に覆われた空地のような場所

隔てられて触れられないそこに

ちいさな虫に似たわたしがうずくまり

こっそり鳴いているのかもしれない

それをカナシミと呼ぶのだよ　と

誰かに言われた気がして顔を洗う

そこから見上げた空は

今日も薄い青を震わせているだろうか

濡れたままの手でコップに水を受けると

透明な縁からあふれこぼれ

一息で飲みほす

すこし苦しい水が

わたしに降り注ぐから

これを生キルヨロコビと呼ぶのだよ　と

呟いてみた

岬多可子先生の詩

休み時間

物理の授業が終わると

理系クラスで

ゆるみ始めているアルミサッシ

二年H組には

証明できない公式のように

いくつもの脚がのばされ

上着をぬいだシャツの背中もある

おろしたての教科書からは

一ページごとに

指紋のついていない

においがわきあがり

ひらかれたノートの綴目に

鉛筆の削りかすが

しずかに落とされている

窓ぎわの一番うしろの席

はいってきた四月の風は

制服の膝のあたりを

すすいで通りすぎていき

定理もひとつ吹き飛ばした

校舎は外側から

一面のひなたにあたためられ

まっすぐな樹からは

やわらかな約束ごとを

たくさん交わすように

若葉があふれている

そのように

あかるく書きくわえられていく学級日誌

もうひとりの日直の手で

黒板がならされると

英文法の授業は

ところで

と始まる

夜

遠い天体で

だれかが思い出しているのか ふいに

テーブルの上を

コップはすべっていき たおれ

水はとても大切なもののよう

ゆっくりとこぼれた

そこから

海はあふれ

夜の暗い床に

波うちはじめた

右のスリッパのなかで

一匹のおさない魚が

つまさきをくすぐっている

かわいたかかとは

つるりとみがかれ冷えていく

閉ざされた窓を

外側からこまかく砕いている

十三夜の月

たっぷりと 水のなかを通り抜けると
ひかりはとてもおいしくなる

そうして

ひとでとか

いそぎんちゃくとか

くらげとか

うつくしい規則のように

生きものはうまれ

やわらかく漂流している

ひとと また

このような晩には だまって

以上三篇『官能検査室』（一九九一年／思潮社）より

箱の卵

淡い 草色と紅色の 和紙の箱に

はじめは 春のお菓子

花がひらいて 並べられておりました

今 そのなかにあるのは

たっぷりの あたたかい もみがらです

赤茶色の卵が三つ

守られて 入っております

小さなこどもでも

お水の入ったうつわを運ぼうとして

しぜんと そろそろ 大切に歩みます

そんなふうには いじらしく

蓋をかぶせられ

ゆつくりと届けられた箱

殻は つよいようにも よわいようにも

思われますが

いずれにしても なかみがあつてのこと

どういうわけか 卵って

そうっと そうっと という気持ちになる

とは言え 孵ることもなく

少しだけ 熱を入れて

崩さずに呑むときは

夜

狐か蛇ほどの

眼にもなっておりますよう

『静かに、毀れている庭』(二〇一二年／書肆山田)より

白い闇のほうへ

うすくらがりは うすあかるみ

灰^ほ見えていたものが 見えなくなり

見えなかったものが 灰見えてくる

そこへ どこまでも 入っていけばいい

ぐったりとした 自分の重さを

たったひとつの 持ち物のように ひきずって

かなしみの 白い布は

くるしみの 白い布は

一面にひろげられてあるだろう

これ以上 失えないほど 失って

そのあと なにもかもが 白く

白く そして 暗く

目も 手も おぼつかない

しずかな 闇のなかで

できるのは ころの仕事

砂利^{じやり}と 豆を たんねんによりわけるように

つまずきを つまずきながらかぞえるように

ゆつくりと ゆつくりと

祈るとき 悼^{いた}むとき わたくしたち

ひとりずつ立ち それぞれの

もつとも深いところへ向けて うつむく

片方の手は もう片方の手を

あるいは どこかにあるはずの

見知らぬ 熱い手を 求める

吐かれた息 流された涙が

白い闇を あたためる

ほつほつと 筆の先の色がにじむように

小さな炎は点^{とも}され

やがて まじりあつて 大きくかがやく

そのときまで そこに とどまっていればいい

あかるい水になるように

灯りのともる室内から

夜のみつしりと重い庭を

見よう見ようとしなければ、そして

見よう見ようとしても、でも。

あかるいところから くらいところは見えな、

そこで 草や石や幼いもの、

知られずに 泣いているのかもしれないでしょう。

夜を盗む指のような虫、

葉よりも花 花よりも実を

どうしたって 食い荒らしたいのが

わたしだったのかもしれないでしょう、

どうしたって あまくてやわらかいほうへ ほうへ

身をよじりながら這^はっていつて。

黒く濡れた庭から 灯りのともる室内は

とてもあかるく とてもとおく思われました。

その底近く 痛んでいるものたちは

それぞれに 自分の傷を痛んでいる。

あ、結ばれた草の傷から垂れるひとしずく、

いつかずっと先 そつとひらかれるあたりで

あかるい水になるように。

貝と蕾^{つぼみ}

わたしたちの三月には

十日があり 十一日がある。

砂の粒を吐く貝 蜜の珠を抱く蕾、

可憐な 薄黄色の 息がある。

そうして 力なく閉じたまま

うずくまっていた わたしたちの、

そのうえを ゆるさずに難^{むづ}いだった

火と水。裂かれ 破られ、

でも それでも。わたしたちの三月には

濡れて薄桃色の 貝があり 蕾がある。

以上二篇『あかるい水になるように』(二〇二〇年／書肆山田)より

長田典子先生の詩

お祭り

ててんつく ててんつく どんどん

わっしょい わっしょい

いつもいっしょの男の子たちが

遠くで神輿をかつぐ

わっしょい わっしょい

植木に囲まれ そこだけ円く明るむ庭に反響する

遠い声

知っているのに知らない人の

わっしょい わっしょい

あたしもお神輿かつぎたかった

とつぜん知った

せかいのそとがわ

薄暗い

奥座敷の真ん中で

わんわん泣いて じだんだふんだ

叫びながら じだんだふんだ

あたしもお神輿かつぎたかった

泣きながら でんぐりがえり

でんぐりがえり

ててんつく ててんつく どんどんどん

猫がねずみを啜えて

庭に座る

明るく円い光の真ん中に

まだ震えてるねずみを置いたから

捕まえて

ひきだしの箱に隠したよ

猫はぶいっと植木の陰に消えてった

ててんつく ててんつく どんどん

ぴーひゃらひゃら

どん

裸電球 麦藁の匂い

秋祭りの夜

はちまんさまのお座敷は

うすぼんやりの幻燈だ

男衆の和太鼓どんどこどんどこ

お稲荷さん食べて おだんご食べて

お腹まんまる 涙も乾く

あたしはでんぐりがえる でんぐりがえる

月はぴかぴか光っていたよ

ススキは穂を銀色にゆらしたよ

わっしょい わっしょい

でんぐりがえる

そらいちめんの星きらきらきらら

山羊が草の葉裏に赤い実みつけて口に入れる

朝になったら あたしはひろうよ

山羊が落とした ひみつの黒曜石

ててんつく ててんつく

どん どん どん

わっしよい わっしよい

でんぐりがえる

お祭りだ

猫もねずみも山羊もいっしよにでんぐりがえれ

だれも知らない真夜中の

スポットライトの真ん中で

お稲荷さん食べて おだんご食べて

月も星もスキもいっしよにでんぐりがえれ

お祭りだ

黒曜石のお祭りだ

藁や落ち葉や小鳥が落とした羽根のお神輿

作ろうよ

わっしよい わっしよい

どん どん どん

黒曜石のお祭りだ

祈り

あなたたちの涙は
とつぜん

冬の水位として移動する

続く血脈をたどり

伝えよ、と

頭蓋に滴るので

悲しみが込みあげてしまうのだ

寒いでしょう

冷たいでしょう

結露する窓枠

見る

見えない

津久井の山々

青く霞む稜線が

疾うに失われた地名へとわたしをみちびく

津久井町中野字不津倉あざふつくら

湖底の墓地に今もまだ横たわる

遠い血脈

はじまりの

あなたたちのことを

伝えよ、と

冬の水位、滴るので

窓は　ここで

永遠に結露する

蛇行

今朝は

慌てて卵を割った

歪む湖面とともに

フラッシュバックする

ダイナマイト
発破音の響いていた日々

谷に満ちてくる水から

逃避する蛇の幻影は

遠く

鱗を鋼に置換して

ホームに急行が滑り込む

蛇は身を振りながら湖面を泳ぎ

つゆくさ つりがねそう つるぎきょう

初夏の眉をなぞりながら

鶏小屋のまだ温かい卵へと向かう

蛇か わたしは 蛇なのだ

花首が揺れて

きつねのよめいり

高速で移動する窓を水が斜めに走る

歪んだ湖面からダイナマイト
発破音の響く場所へ

瓦礫の隙間へ

わたしの卵を産み付けに行く

笑う羊

熱波のなかを

漂うように歩く

日付変更線を越えたのは

ずっと前のことなのに

うまく足を地面に着地できなくて

手も足のようにつかわなければと思いながら

森のように大きな公園につきあたる

高層ビルに囲まれた

四角いセントラルパーク

そこは むかし 羊のいた牧草地だったという

羊のかわりにヒトがたくさんいて

海辺でもないのに水着になって

芝生の上に寝転がり 肌を焼いていた

影のないヒトたち

わたしは過去から迷い込んだ

一匹の羊なのか

南中する太陽の下で

チキュウ、チキュウ、と

青いガイドブックを指さして

にやにやししながら囁きあうヒトがいた

知ってるんだ

チキュウ、ってニホン語

可笑しくなつて

バアハハハ！

笑ってしまった 羊みたいに

わたしはチキュウではありませんよ

ワタシハ羊ナノデス

ぴょーん ぴょーん

跳び跳ねる

羊ナノデス

牧草地を

越えて

ぴょーん ぴょーん

ぴょーん ぴょーん

東に向かって道を渡る

真夏の

昼下がり

客の出払ったホテルの

宙空に吊り下げられた中庭に迷い込む

ぴょーん　ぴょーん
ぴょーん　ぴょーん

ビルの壁に囲まれた
ゼリー状の無重力地帯
気狂いじみた暑さが
身体^{からだ}に粘り付いてくるから
ウールを脱ぎ捨てる

きついカクテルをたてつづけに注文して
喉を潤す

溺れる

ベッドみたいに大きなソファの上に

寝転がる

ガラス張りの天井は

床だったのかもしれない

いつのまにか

チキュウ、を　手放す

わたしを助け出さないでください
わたしを連れ出さないでください

この街は

たくさんの時間が同時にあつて

捲られる書物のペエジのよう

風が吹くたびに

閉じたり開いたりしている

だから

びよーん びよーん

びよーん びよーん

わたしはペエジを豎琴にして

漂っていたい

びよーん びよーん

びよーん びよーん

笑う羊として

だから

※青いガイドブック…『地球の歩き方』シリーズ（ダイヤモンド・ビッグ社刊）のこと

『ニューヨーク・デイグ・ダグ』より

針都

蟬の死体があった

狭く 仕切られた

草叢の中に

ひっそり

錆びた鉄屑みたいに

崩れて

黒土に染みていたが

羽根だけはもとのままだった

パズルから抜け落ちた破片がひとつ

葉裏で冷やされた風に震えながら

まだ 生きている

尖って 痛い

三角形

丸く蕩けながら歪んでいく太陽

tear drop 苦へし吐き出す

高層ビルの突き刺さる 寒い針の街が

赤々と 溶解しても

君は死なない

ひらひらの

羽根としての

三角形は

それでも銀色に輝いているから

飛べ

飛び立つナイフだ

夏の

厚い布を

不可聴の高音を上げながら

白く

引き裂いていく

『はねおと翅音』より

田中庸介先生の詩

田中庸介の詩

「午後」

「オフ、」

「数字短歌自歌合七番」

「塩漬けにされた鯖と彼女」

『山が見える日に、』

同

『スウィートな群青の夢』

『ぴんくの砂袋』

午後

もうこういう時はハーブドロップがおいしい。

タチジャコウソウ

ミチヤナギ

サルビア

ダイウイキョウ

ヘラオオバコ

ゼニアオイ

セイヨウノコギリソウ

がついた袋は、美しいよね。

幸福だね。

もどかしいね。

オフ、

名もない野草の名が恋しくなった。道ばたに、
ぼうぼうと伸びた草が風にそよいでいる、ような風景を
見る毎日がつづく、この日ついに、ということはなく
疲れて、特に目が疲れて歩くような日々の大切
が切れて途切れて、やわらかくなる

疲れているからさかしまになるようだった。残されない
愛や恋というような、ただ従順だから排斥される捨てられる
名もない野草の名が恋しくなった。哀しい午後の、

名があるような、文のあるような

裏庭、とはそういう場所ではない。穴掘って

捨てる場所だ。そうしてそこにまた草ぼうぼうと生えている

場所だ。ああ生命は、乱雑な、

花が咲いている。秋の野に咲く草花である、

それを見ていく。歩いていくように見ていくように

残酷な力は継がなかった。かわいい

川が流れているからで、土地が川によって削られていくと谷が
できるからで、その源頭のところをいくつも渡ることになる
オクチチブは霧に埋まっていた。霧雨に埋まっていた
お盆明けの山小屋は淋しく、小屋番は悲しそうだった、と思う。

目が覚めているときに、何もいうことはない、と感ずることもある
見ていくように歩いていく。見たからね、私は
そして歩いた。何か思いあたることはないのか、心に
自然林の植生、明日まで黙って眠ればよい。

草花の名前が恋しくなった。

⑥ 数字短歌自歌合七番

第一番

左	1 3 3 3 1	1 3 2 3 2 2 3	1 3 3 3 1	3 1 1 3 2 2 3	2 2 2 3 1 1 1
右	3 1 3 1 2	2 3 3 1 2 2 2	3 3 1 1 2	3 3 3 2 3 3	1 3 2 2 3 3 3

判 「1 3 3 3 1」など軽やかな繰り返しのある左歌に対し、「3 3 3 3 2 3 3」など右歌の調べは雄渾である。しかし右歌の結び「3 3 3」は左歌の結び「1 1 1」に対して品を欠く。これをもって左歌の勝とする。

第二番

左	1 3 3 3 1	1 3 2 3 2 2 2	2 3 2 2 2	3 3 2 3 2 1 3	3 3 1 3 2 3 3
右	1 1 1 1 2	3 3 1 3 2 3 3	2 2 2 2 3	2 2 3 3 1 3 3	2 3 3 1 2 2 2

判 単調に調べが盛り上がる左歌の造りに対し、右歌の調べの起伏を見よ。岩間にこだまする朝の風音のような「1 1 1 1 2」の幽玄からいきなり盛り上がる「3 3 1 3 2 3 3」の高みへ。そして高原を吹きぬける風のごとき「2」の多用。右勝。

第三番

左	3 3 3 3 1	3 3 3 3 1 3 3	3 3 1 3 3	3 3 1 3 2 3 3	3 3 3 1 3 3 3
右	3 3 3 1 2	3 3 1 3 2 3 3	3 3 1 2 2	3 3 3 3 1 2 3	1 3 3 3 2 3 3

判 左歌はすっきりと姿が良い。「3 3 1 3 2 3 3」にただ一つ使われている「2」が第二番左歌や第三番右歌とはまた趣を異にして心に触れる。左歌の勝。

第四番

左	1 1 1 1 1	1 1 1 3 1 2 3	1 3 3 3 1	3 3 2 3 1 1 3	1 3 3 1 2 2 2
右	1 1 2 1 1	1 3 3 1 3 3 3	3 3 3 2 3	3 3 3 1 3 3 3	3 3 3 1 3 3 3

判 はっそりと柳のような左歌の調べに対して、右歌の「3 3 3 1 3 3 3」の繰り返しには万葉の素朴がある。左歌「3 3 2 3 1 1 3 1 3 3 1 2 2 2」など言う緩急の艶をとり、左勝。

第五番

左	1 3 3 3 3	3 3 3 1 3 3 3	3 3 3 1 3	3 1 1 3 2 2 2	3 3 2 3 2 2 2
右	3 3 3 3 3	3 3 3 2 3 1 3	3 3 3 2 2	3 3 3 1 2 3 3	3 3 1 3 2 3 3

判 右歌の調べは澄潤としてたけ高い。よって右勝。

第六番

左	3 3 1 2 2	3 3 1 2 3 1 3	3 3 2 2 3	3 3 1 3 2 3 3	3 1 3 1 3 3 3
右	3 3 1 3 3	2 2 1 1 3 2 3	2 2 1 1 3	3 3 3 1 3 3 3	2 3 2 3 2 2 2

判 「3 3 1 3 2 3 3」などこり押す左歌の単調に対し、「2 2 1 1」「2 3 2 3」など言う右歌の調べは優にして艶である。右勝。

第七番

左	3 3 3 1 1	3 3 1 1 1 1 3	3 3 1 1 3	3 3 1 1 3 3 3	3 3 1 3 1 1 1
右	1 3 3 3 1	3 3 1 3 1 3 3	3 3 1 3 3	2 2 2 2 2 3 3	1 1 3 3 2 2 3

判 中有の「2」をいっそ爽快と呼べるまでに一貫して排した左歌に対し、右歌は同趣の上の句から「2 2 2 2 2」たる連続「2」にだれこむ。ひとつの過剰さによって中有を凡庸から救い、かつ強度に奥行きを与えた。よって右の勝。

塩漬けにされた鯖と彼女

異形の者

についてまだ私は書いていない

蜜のような快楽

についても私は書いてこなかった

天変地異

について私は書いていないし

塩漬けにされた鯖

について私はまだ何も書いていない

しかし私は

キャリーについて考える

キャリーバッグをごろんごろん引きずって

人々はどこへ行くんだろう

駅の階段をばたんばたん上がる

あの中には異形の着ぐるみが一体ずつ入っていて

それを身につけて別人格に

変身するために

蜜のような快楽を味わうために

家庭へ職場へ舞台の上へ

人々はキャリーを引きずって

出撃する最中

マスクをつけている

白い女子

が多い

特に若い女子が白いマスクをつけているのだ

天変地異

の結果

なぜかそういうことになっている

マスクの内側に

塩漬けにされた鯖がごろがつている

眼の下の隈、深く

すでに死相があらわれている

蜜のような家庭に育てられた

お嬢の頰癍、

箸の上げ下ろしまで

文句をつけられて育った

お嬢の頰癍、

わたしは白いマスクをつけた箱入り娘だぜ

文句あるのか

大量のキャリーに詰められて

かどわかされる最中に

そいつがまた

車輪のついた箱にのつけられて

レールの上を

殺人的なスピードで

右往左往するあいだに

真っ黒のマスクで顔を隠した黒い帽子の男がよお、

黒いコートに身を包んで

車室の隅に佇んでこっちを見ている

異常な眼の動き――。

彼はたぶん詩人だ

純銀もざいくの指輪がごっそり

彼の指に嵌まっている

だが彼の妄想を突き破るのは

塩漬けにされた鯖、

鯖の細胞という細胞は

高濃度の食塩によってからからに干からびて

否が応にもその上に

またも白く塩をふいている

その白いかたまりから

夏のアスファルトの上に塩水がしたり落ちる！

烈火の太陽に照らされて

鯖のかたまりは身を焦がし

塩と脂とをこぼしながら

あっけなく

灰と泥とにまみれてゆく

やがて

ぼろぼろの着物をつけた異形の者が

その泥の中から

一人、二人、三人……、

と立ち上がり

腕をつきだしたまま

高速で円を描く

そいつらは鯖の精霊だ

塩漬けにさせられた鯖の精霊、

天変地異の前触れのように

一人、二人、三人……、

輪になって

鯖の

精霊は

高速で円を描くのだ

毛むくじやらの腕を突きだしながら

原始人のように

娘は

白いマスクをかなぐり捨てて

そのダンスの輪に加わった

彼女は塩漬けにされた

鯖の

精霊

の

塩漬けにされた

鯖の

エートス

を

彼女自身のものとして

受け取るのである

彼女は

この奇怪な

鯖の頭をした

灰色の

精霊たちの

ダンスの輪

の中で

この世界の

奥義を

耳打ちされる

生き物は

鯖のように

利他的であらねばならない、

その利他的な営みによってこそ

世界の航跡は

もっともナチュラルな弧を描くのだ、と。

ものすごい塩味が口の中に広がる

そして

なんともいえない生臭いえぐみが

鼻腔について

彼女は

うめき声をあげる

白目をむいて

あおむけに

蜜の流れる大地に

倒れてしまう

焼いていない塩鯖のエキスが

間違えて

お口に入った

しかし彼女は

ついに

生き延びる

いのちの

再生の、

せいめいの

雄叫びを上げる

鯖、

蜜のような

鯖、

蜜のような

(たかが塩鯖ではないのかしら、

いち、にい、さん……、

いち、にい、さん……、

今日の作業



今日の自分の名前





何が見えた



何をした

ことばを書きとめてみよう

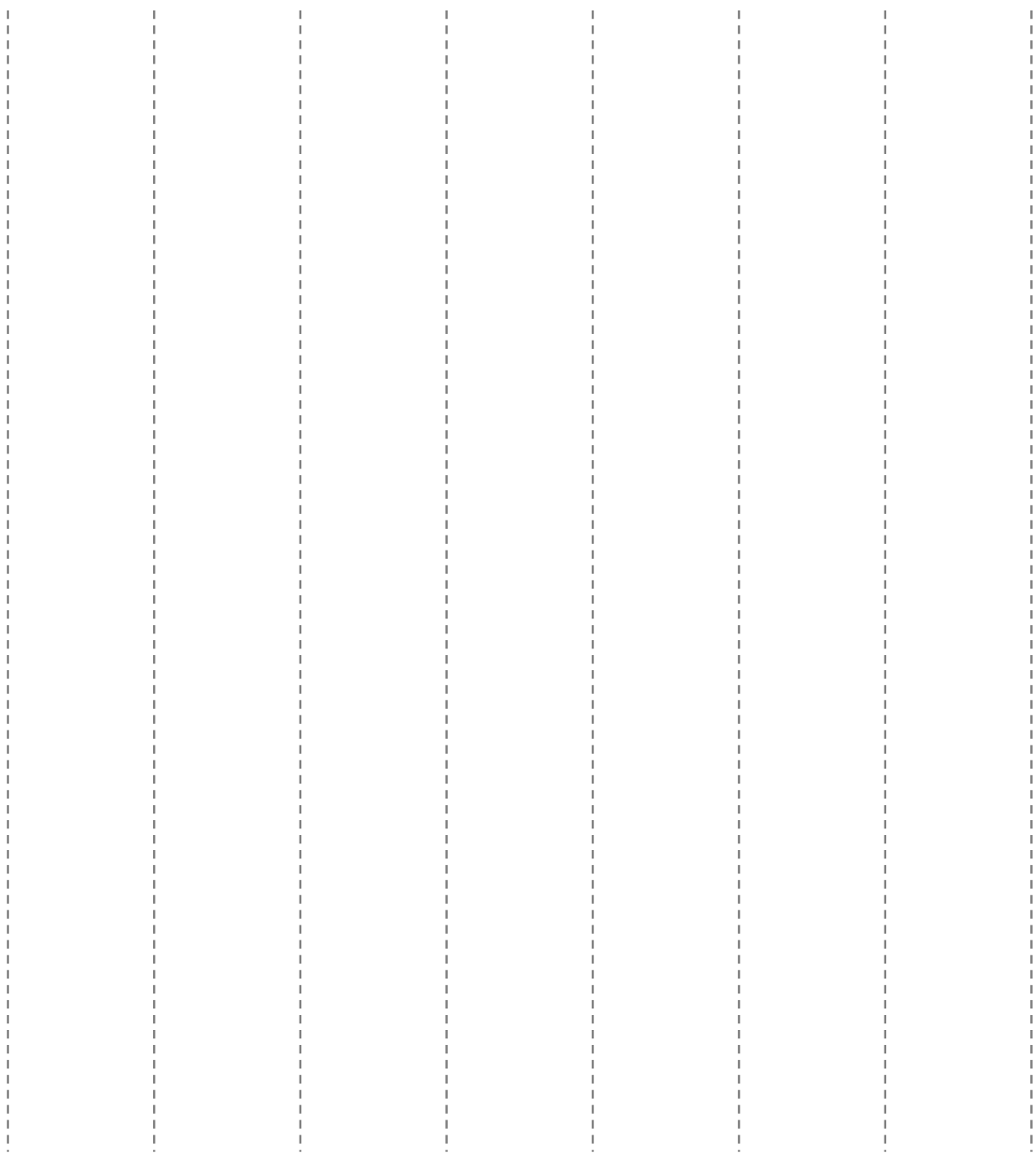


どうだった



何を見つけた



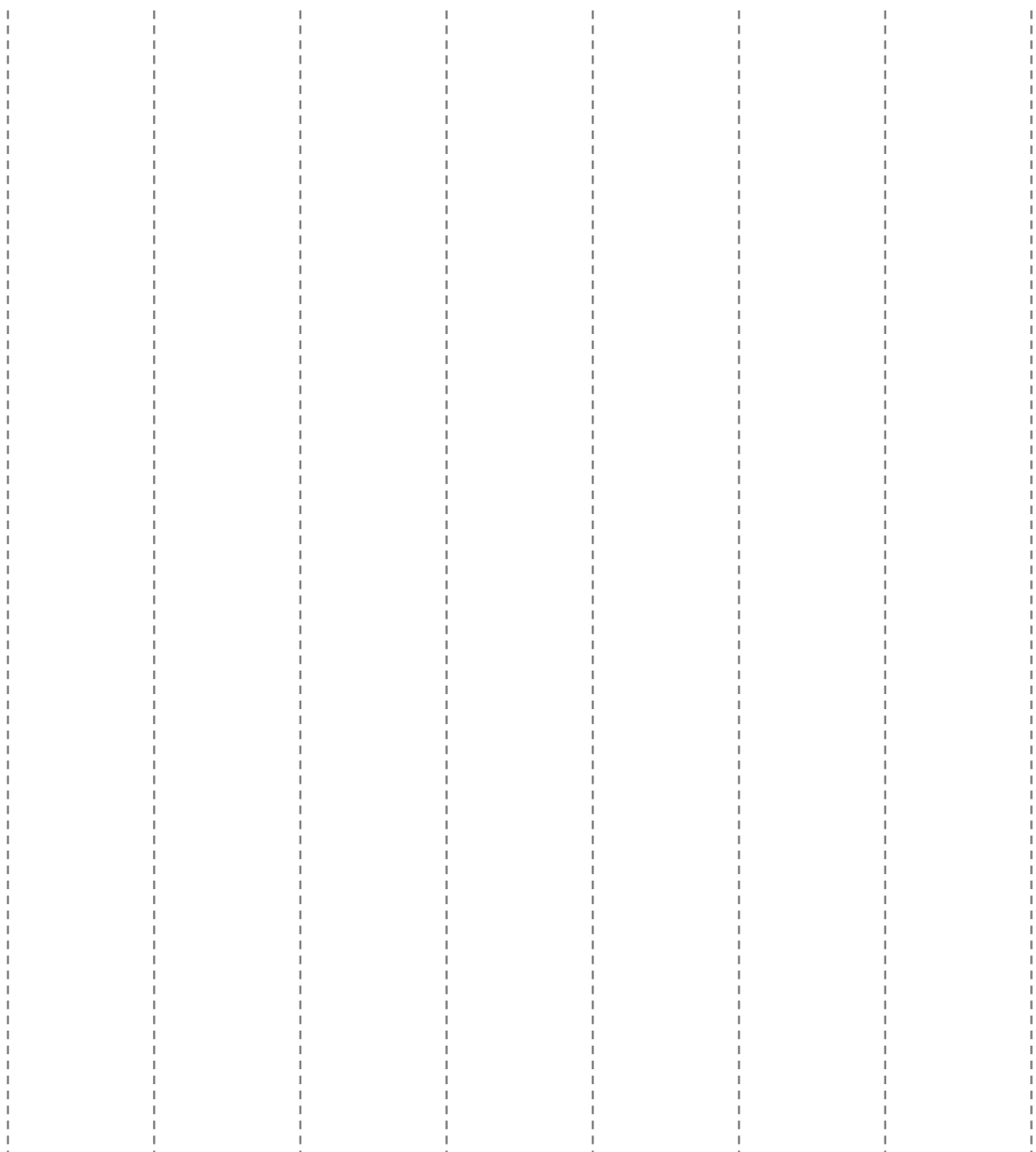


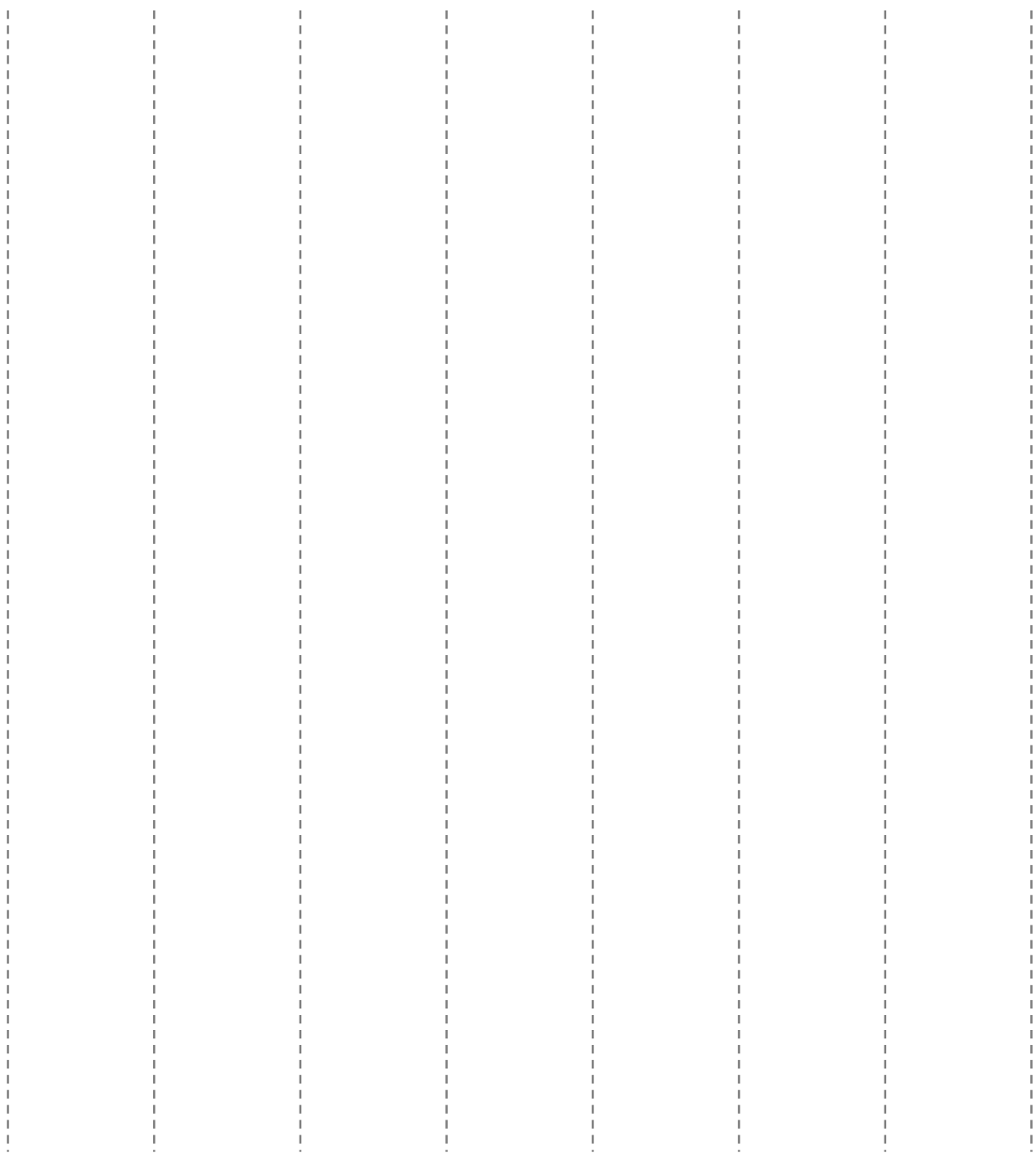


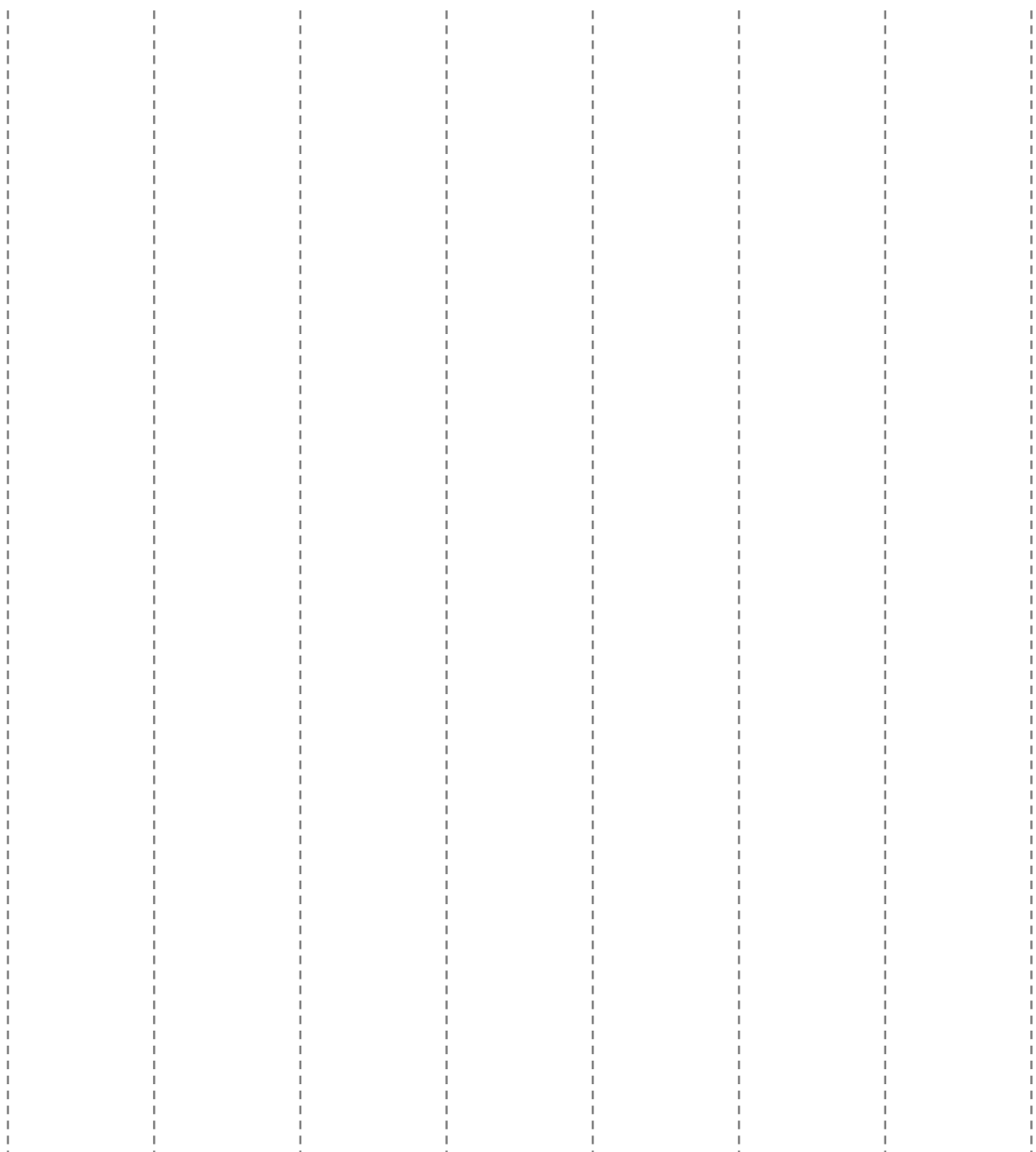


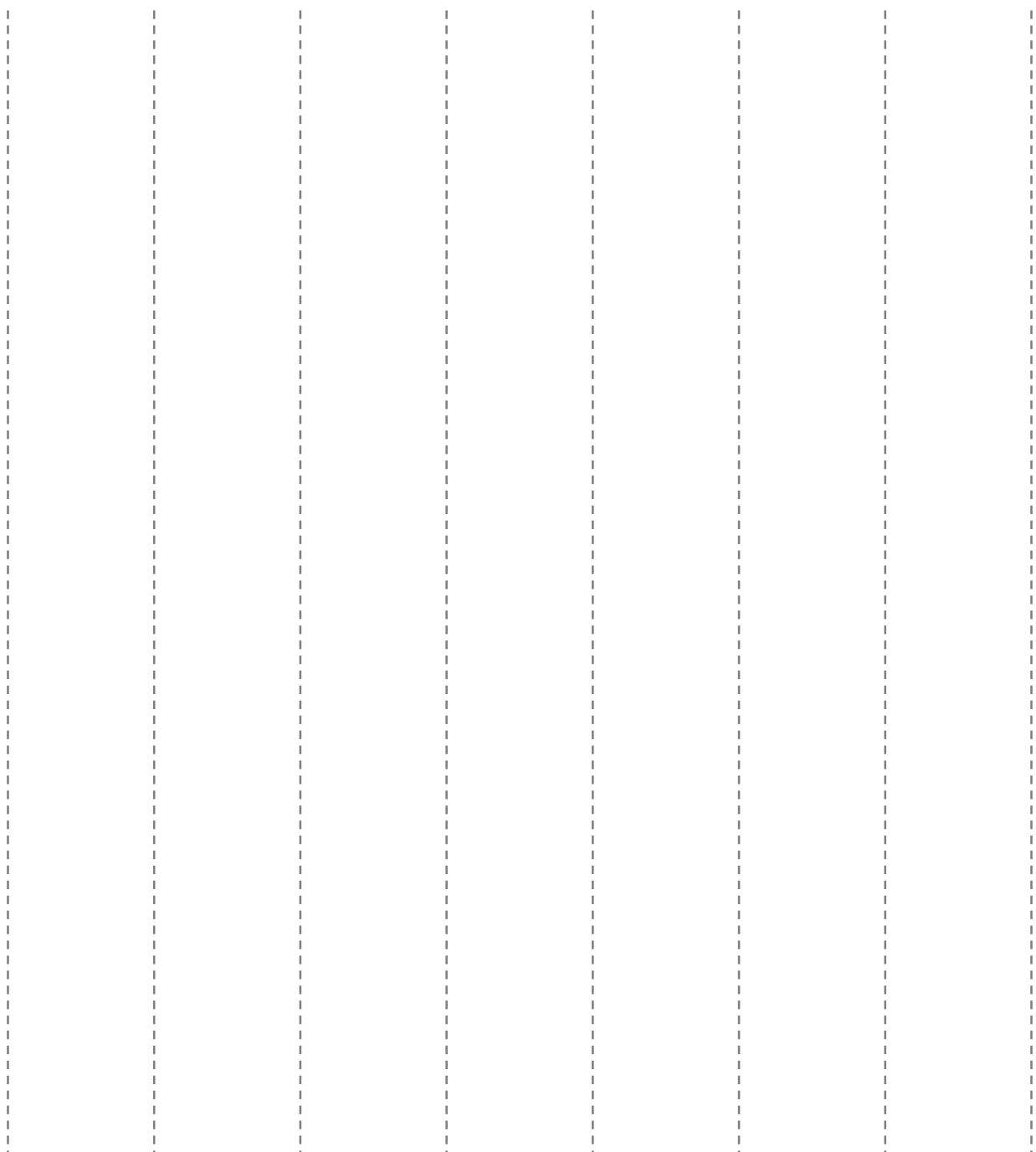


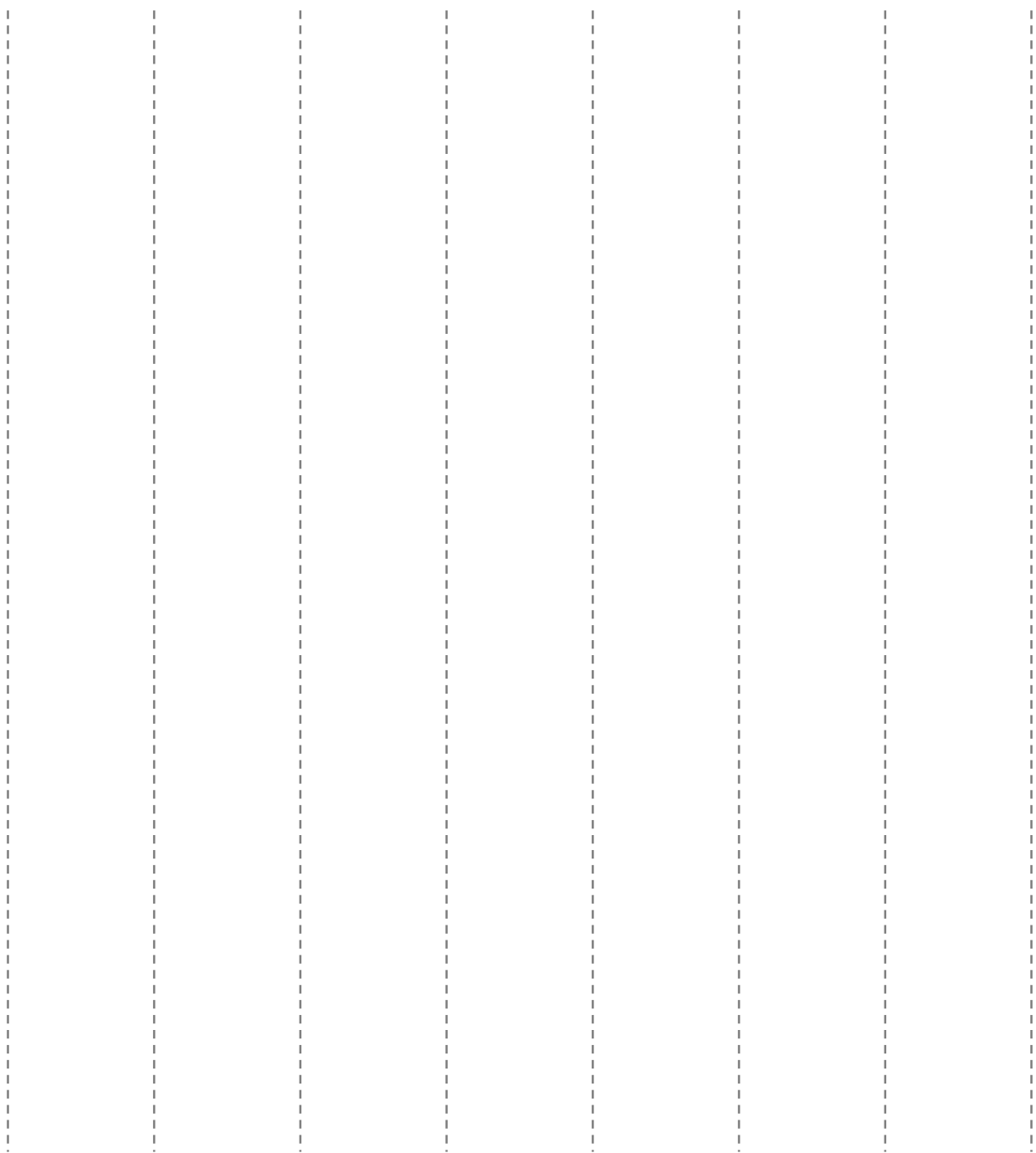


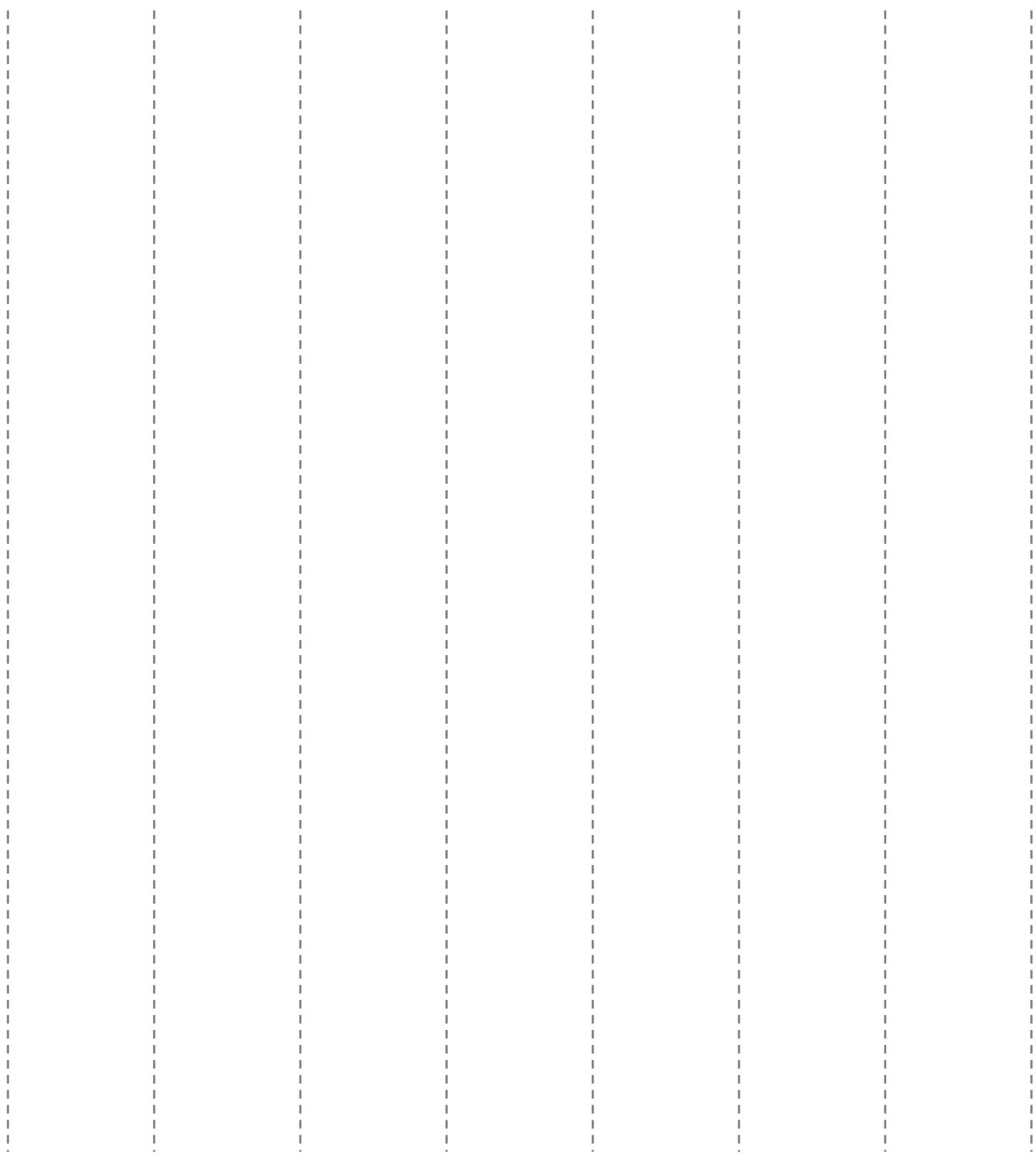


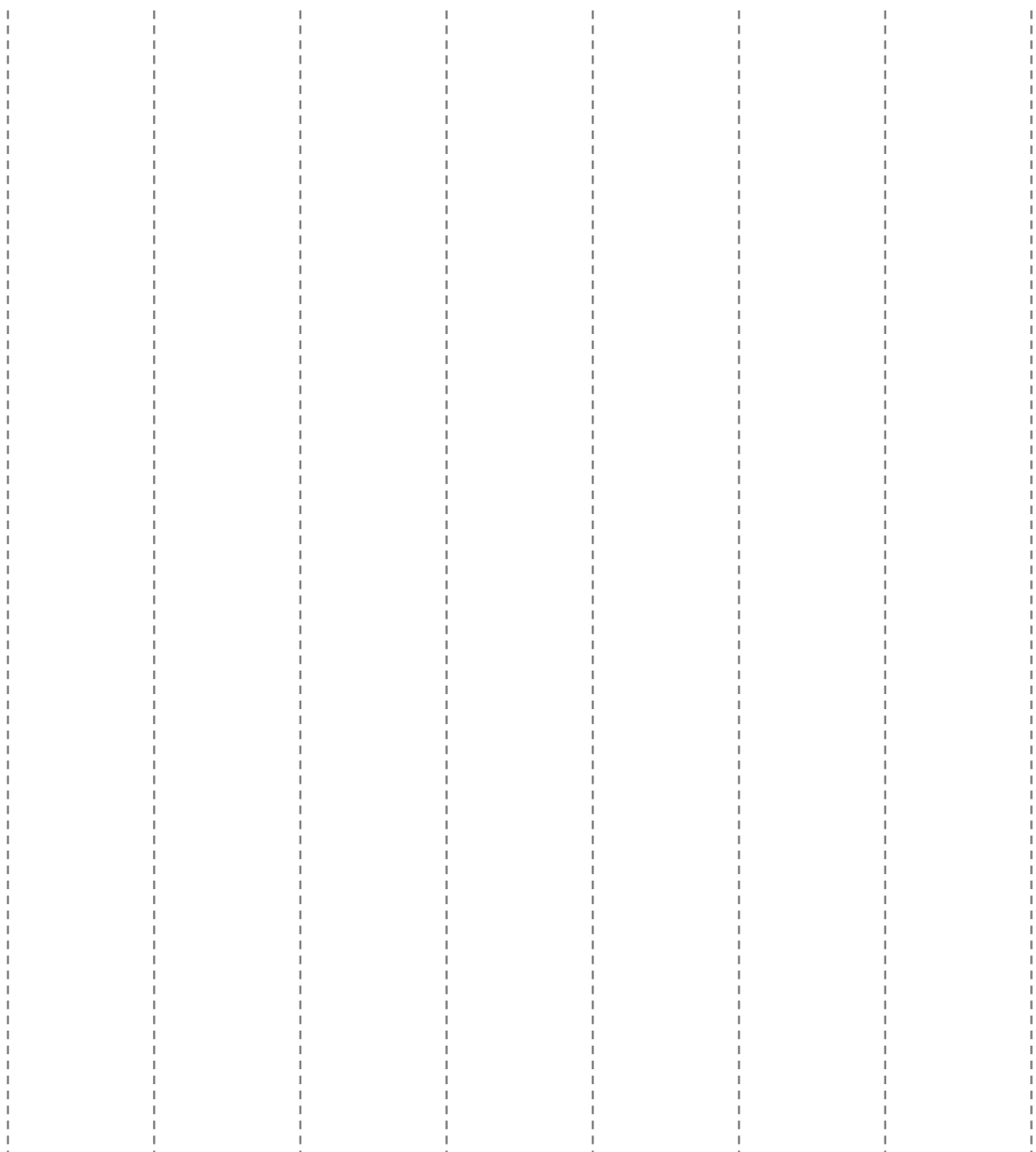


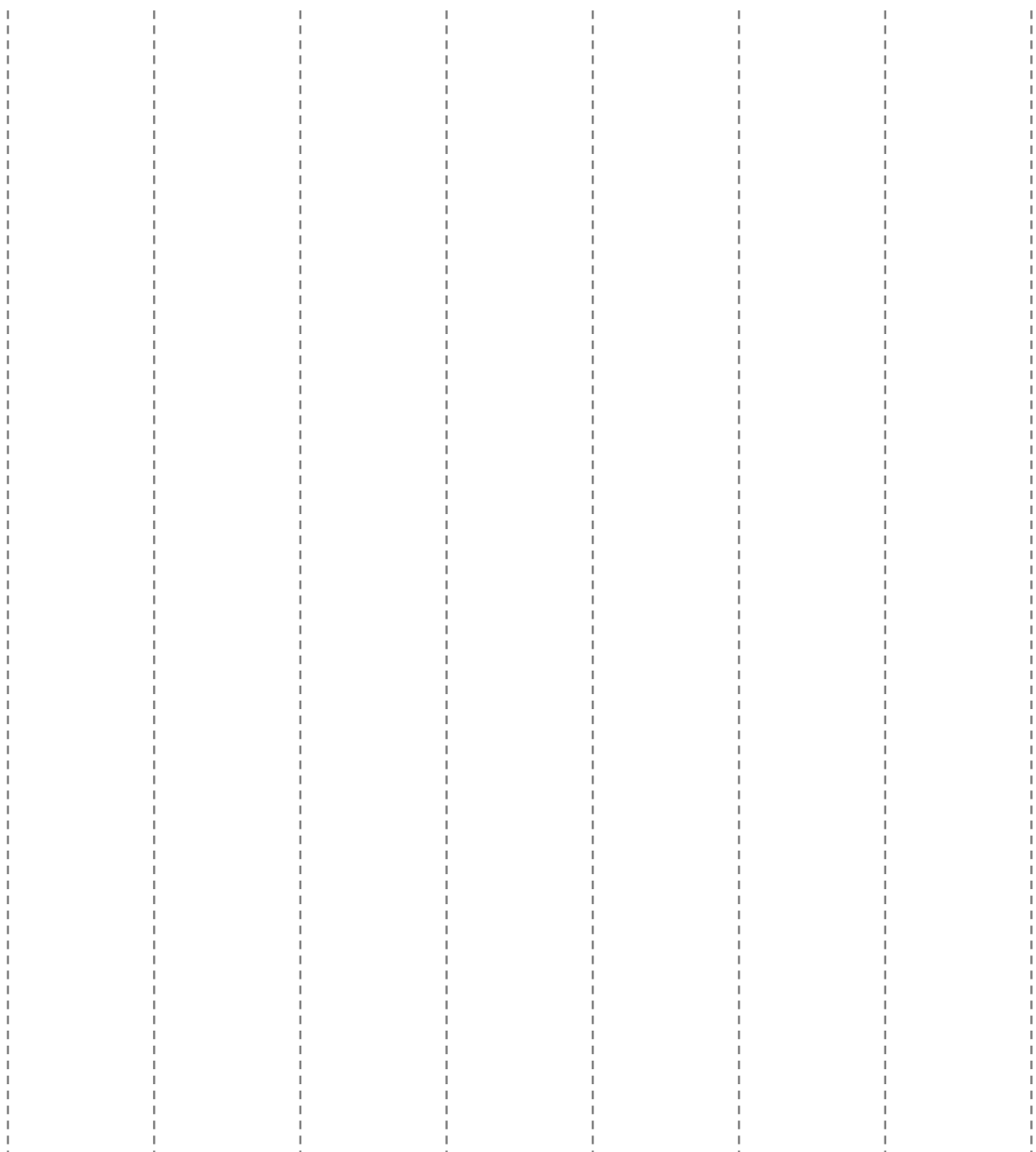


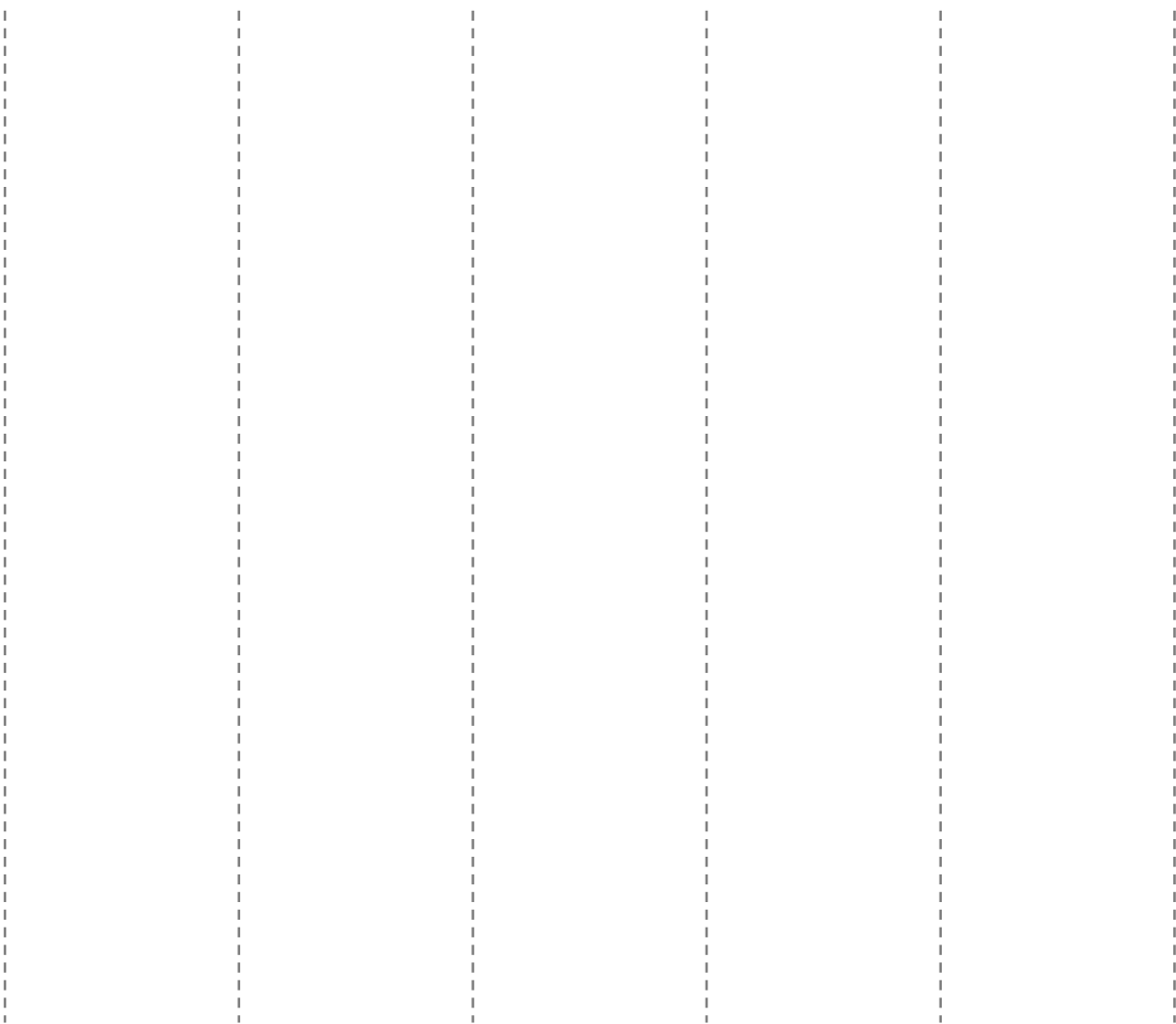


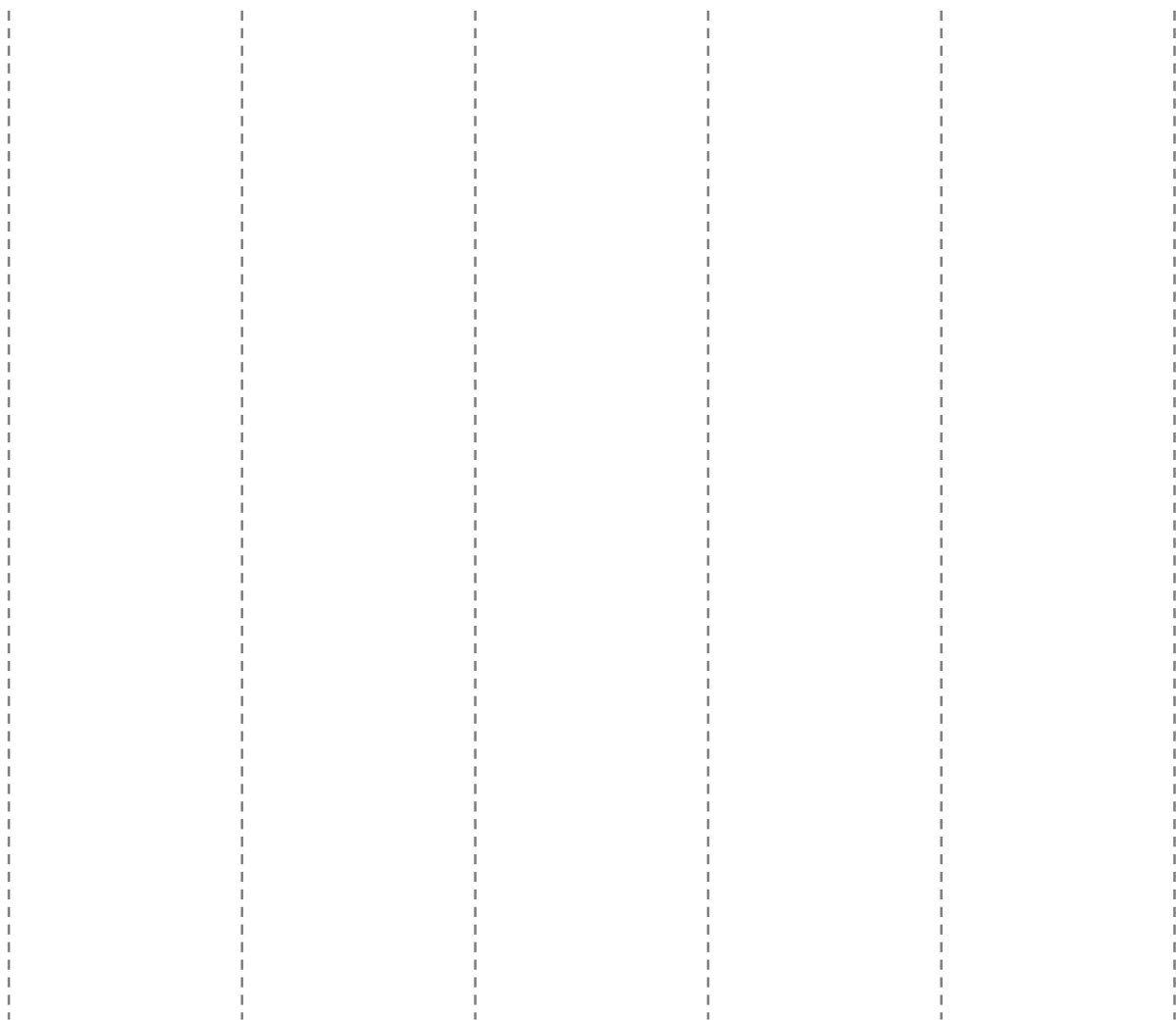


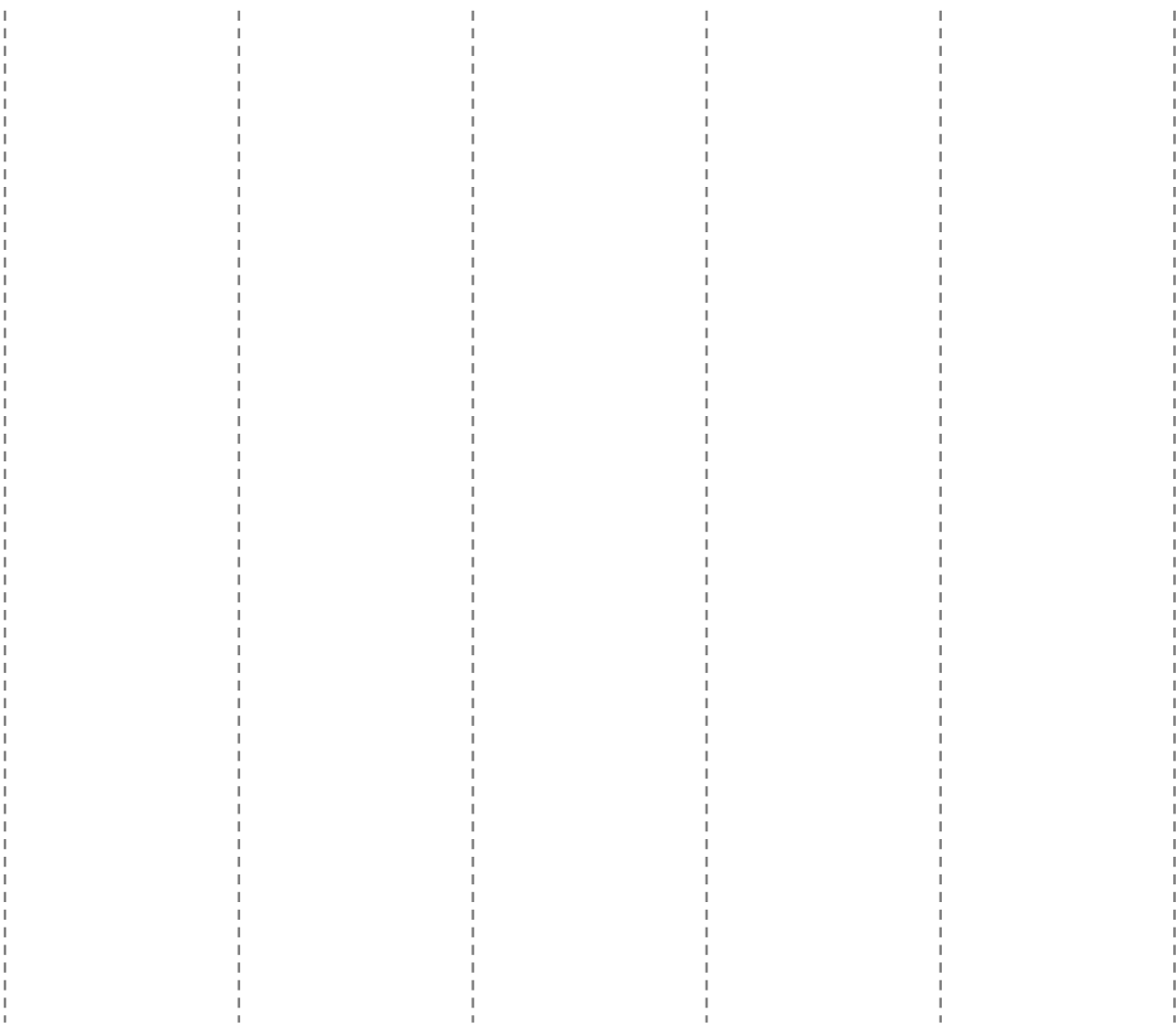


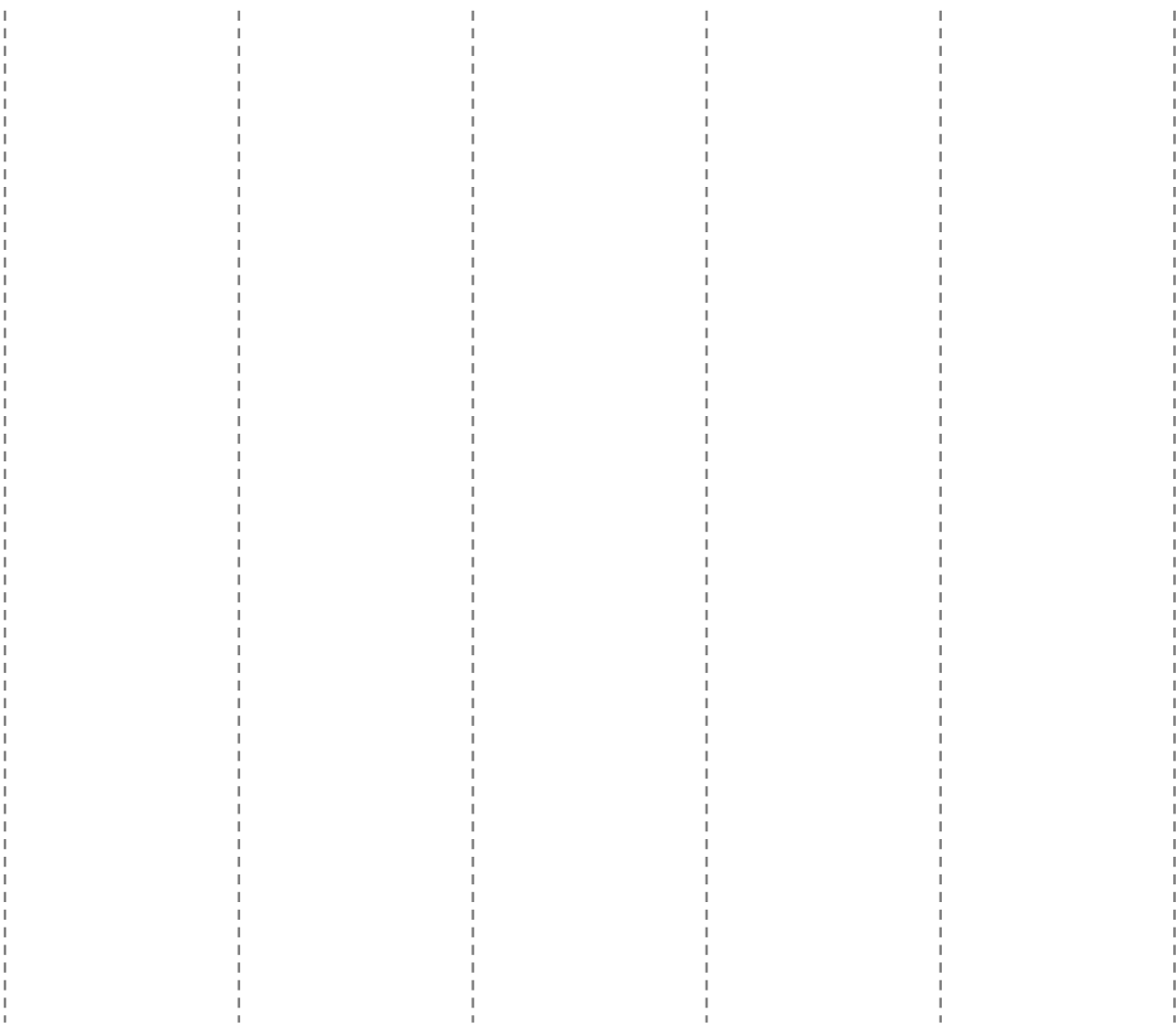


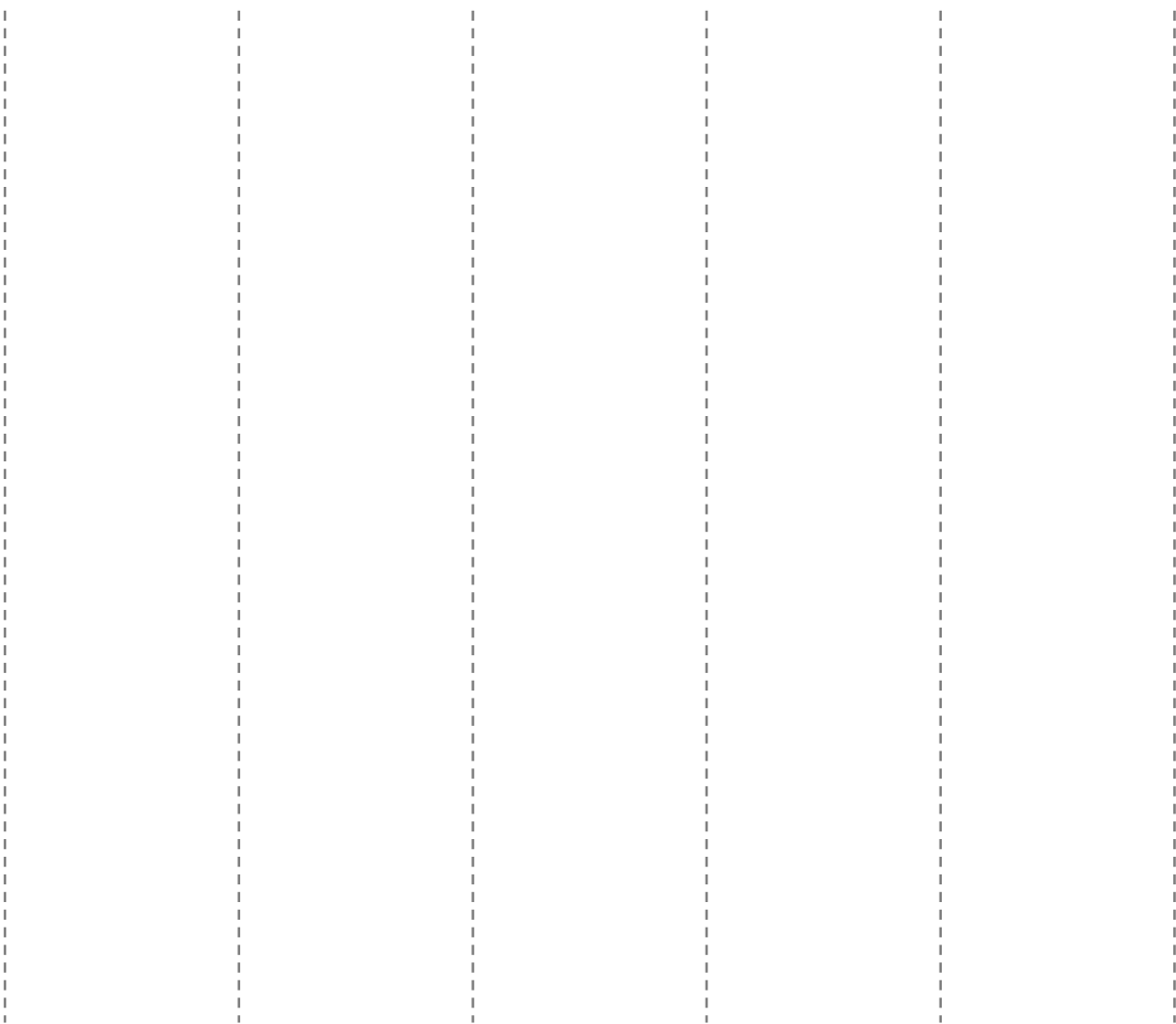












































ふろく





カモンちゃんってだーれだ？ ～彦根城との関係～

彦根城は、国宝5城のうちの1つ。初代藩主（はんしゅ＝おとの様）は徳川四天王のひとりである井伊直政（いいなおまさ）です。彦根駅前には馬に乗った直政像があります。

「関ヶ原の戦い（1600年）」直後に死去したため、直政は彦根城を見ていません。築城は息子が引き継ぎました。東海道、中山道が通る近江の国（滋賀県）は、東西交通の要（かなめ）であり、徳川家康が、ここ彦根に戦いの基地となる城の建設を急がせました。

実戦に強い仕組みを持つ城でありながら、優美な姿。近くにある古いお城や石垣、建造物を運び込んで建てられたリサイクル城でもあります。1622年に完成しました。

それから約230年後、13代目の藩主となったのが井伊直弼（いいなおすけ）です。14番目の男子として生まれた直弼は、もともと藩主になれる順番ではありませんでした。しかし、自分の可能性を信じて、城下の埋木舎（うもれぎのや）で学問や武術の修練を続けたことで、藩主になる道が開けたのでした。

やがて徳川幕府の大老となった直弼は、アメリカとの間で「日米修好通商条約」を結びます。キーワードはその他に「安政の大獄（あんせいのだいごく）」、「桜田門外の変（さくらだもんがいのへん）」、「一期一会（いちごいちえ）」など。

直弼の役職名は、掃部頭（かもんのかみ）。カモンちゃんの服装と名前の由来はここに 있습니다。

滋賀県は近江の国 ～教科書にも出てくる地名の数々～

歴史ファンは見逃せない！滋賀県ゆかりの戦国武将は、ドラマにもたびたび登場。

ひこにゃんはどうして猫なの？

豪徳寺（東京都）でのエピソードから。2代藩主井伊直孝を手招きし、雷から救った猫にあやかって。

兜（かぶと）は「井伊の赤備え」（朱塗りの武具）をイメージしている。

比叡山 坂本寺
三井寺
義仲寺 石山寺

賤ヶ岳

伊吹山

長浜城

関ヶ原

佐和山城

彦根城

安土城



ひこにゃん

信楽

滋賀大学ってどんなところ？

国立大学法人 滋賀大学の2つのキャンパスと3つの学部：

◆彦根キャンパス

□ 経済学部

□ データサイエンス学部

◆大津（石山）キャンパス

□ 教育学部



カモンちゃん©滋賀大学

滋賀大学ができたのは今から73年前のこと。それぞれ別々の歴史を歩んできた経済学部（彦根）と教育学部（大津）が、滋賀大学として1つになったのです。

経済学部：

まもなく創立100周年を迎えます。前身の彦根高等商業学校は、日本国内に13校あった官立高商の1つです。当時は「彦根高商」として親しまれ、学生は全国から集まっていました。リーダーシップをとって活躍するビジネスマンを育てる国立学校でした。

現在は「士魂商才」の精神を発展させた形で、より高い専門性を持って仕事ができる人（グローバル・スペシャリスト）を送り出すことを社会的使命としています。



教育学部：

滋賀県師範学校を出発点としています。150年近くにわたって教員を送り出し、地域社会の教育に貢献してきました。現代社会の問題に向き合い、解決ができる人材を育てることをめざしています。また、芸術・文化・自然にふれ、感受性を養うことで他者への共感と理解が生まれる信じ、人間性を豊かにする教育に取り組んでいます。



データサイエンス学部：

スマホでのお店探し、コンビニでの買い物、電車やバスの交通機関。インターネットとキャッシュレス（現金を使わない）があたりまえになった生活は、利用者が気づかないうちにビッグデータをどんどん作り出します。医療、教育、行政の現場は、そうして集まったデータの処理や分析ができる人を求めています。データサイエンティストを育てるため、5年前に創設されたのが、日本初のデータサイエンス学部です。

課題の発見に始まり、解決力、構想力、行動力、さらにコミュニケーション力をつけていきます。



研究者ってなんだろう？ ～大学の先生には2つの顔がある!?～

大学の先生の仕事は、大きく分けると2つあります。1つは「授業」をすること。そしてもう1つは「研究」をすることです。

「授業」をする先生の姿は、みなさんもよく知っているので、今日は「研究」をする先生について説明します。

研究者が活やくしている例としてわかりやすいのは、毎年大きな話題となるノーベル賞でしょう。『医学・生理学』『物理学』『化学』『経済学』という分野で、世界中のすぐれた研究者が注目され、その仕事内容が評価されます。研究者はそれぞれ得意とする専門分野を持っていますが、それは数学、文学、歴史、芸術、スポーツなどさまざまです。興味や関心のあることに対してオリジナルのテーマを持ち、必要であればチームを作り、出した答えを論文という文章にして発表する。それが研究者の仕事です。

研究によって解き明かされたことは、新たな発見、発明につながるだけでなく、これまでみんなが信じてきた常識をひっくり返すような、強いメッセージも持っています。

研究者である大学の先生たちは、強い探求心のもとに、より専門的な知識を身につけています。そのため、社会の課題について新聞や雑誌で解説をたのまれたり、テレビの取材を受けることもあります。



科研費？ カケンヒってなんだろう？ ～研究を支えるお金～

かがく けんきゅうひ じょせいじぎょう

科学研究費助成事情



教育や研究は、それぞれの国家にとって自国を豊かにするために必要なものです。研究は国民を幸福にするためにあると言ってもよいでしょう。そのため、国は研究者を支えるために政策を立て、国の宝として大切に育てていこうと考えています。

本を買ったり、実験道具を揃えたり、調査のために出張したり、研究活動にはお金がかかります。そこで、国は先生たち研究者を助けるためにお金を出すことにしました。それが科研費です。科研費を受け取るためには、自分が研究したいと思う理由や目的をまとめた計画書を作り、点検を受けます。その結果、「これは何か新しい発見につながりそうだな」と認めてもらえると、お金が支払われて研究に取りかかることができるのです。

今回の詩作ワークショップも科研費を使って運営しています。先生の研究を小中高生たちにもわかりやすい内容にして、プログラムを組み立てています。みなさんの学びの場づくりを、国がお手伝いしているというわけです。

